

---

# とある王国のおとぎ話

paiちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある王国のおとぎ話

### 【Zマーク】

N9151V

### 【作者名】

pa-iちゃん

### 【あらすじ】

孫達に囮まれておじいさんは昔話を始めます。それは、この国ができる前のお話。山里の村で暮らす男の子と女の子が14歳になつて選んだ職業は冒険者・・貧乏な2人には良い装備なんて買えませんが、偶然見つけた迷宮の優先調査権を得ると2人で力をあわせて調査を進めていきます。

「こゝは、とある山国の人町にある、全く普通のお家です。  
ちょっと中を覗いてみますね。

冬の夕暮れ時を迎える、お母さんは夕飯の準備です。お父さんは、  
まだお仕事みたいで帰ってません。

暖炉の前の安楽椅子を揺らしながらお爺さんがパイプを燃らせて  
います。

「ねえ、お爺ちゃん。お話をさせてよー。」

「やードヤと部屋に入ってきた孫達のおねだりに微笑みながら頷く  
と、傍らのマグカップから美味しいお茶を啜りました。

「そうだのう・・・なにがいいかな。」

もつたお爺さんのお話の始めはいつものセリフです。ワ  
クワクしながらお爺さんの周りにおとなしく座った孫達を見ると話  
を続けます。

「・・・そうだー!」の音がどうして出来たのかを話してあげよう。  
・・・昔、昔のことがじやつた。そのころ、こゝは一面の荒れ野  
じやつた・・・」

・  
・  
・

アランはもうすぐ14歳の誕生日です。でも、プレゼントは期待  
してません。去年も、そしてその前の年も、プレゼントはおろかお  
祝いのご馳走もありませんでした。だって彼は病気がちなお母さん  
との一人暮し、とっても貧乏なんです。

以前は裕福な農民だったそうですが、彼の生まれた年に流行病で  
お父さんを亡くしてから、幼い少年を抱え一生懸命お母さんは働い  
たんですが・・・何時しか土地を手放し・・・病気になり・・・今  
では、体の具合がいい時に近所の針仕事をしながら暮らしています。

そんなお母さんを見て育つたアランは村の学校を卒業した12歳から近所のお手伝いをしてお母さんを助けています。

ある日、畠の収穫を手伝つて依頼主の元に戻ると、おじさんが数枚の銅貨を彼の手に握らせると、収穫の一部を村の食堂に運ぶように言いました。彼は、何時もより多いお駄賃を見て「一二二二」しながらOKすると、大きな籠に一杯の野菜を担いで食堂に向います。

まだ、夕暮れ時には早いですが食堂には数人の男達が酒を飲んでいます。アランは、そんな中を歩いてカウンターに行きました。

「おばさん！お届けものだよ。」

彼の声に、奥でお鍋をかき混ぜていた恰幅のいいおばさんが振り返ります。

「おや、アランじゃないかね。すまないね・・・お母さんの具合はどうだい。お母さんにはお前しかいなんだから、がんばるんだよ。」

そんな励ましに苦笑いで答えると、じゃあね！と挨拶して食堂を出よつとした時に、男達の会話が聞こえました。

「・・・・今度の迷宮は・・・・良い金になつたじゃないか・・・・明日も・・・・」

ふ〜ん。冒険者か。アランは小さく呟きました。もうすぐ14歳です。何時までも村人の手伝いを続けるわけにも行きません。そろそろ独立した仕事を見つける必要があります。

村外れの自宅に戻ると、お母さんがスープを温めています。そんなお母さんに、ただいまと挨拶をするとテーブルに着きました。暖かいスープと硬パンだけの粗末な食事を取りながら、今日一日の出来事をお母さんに話します。

・ · ·

今日は、お手伝いの仕事がありません。小さな村ですから何時も仕事があるとは限らないのです。

でも、アランにはやることがあります。裏山に登つて、焚き木を集めるのが今日の仕事です。もうすぐ冬がやってきます。家を暖かくするには暖炉の焚き木が欠かせません。

山の木を切ることはキコリの仕事です。彼にはキコリの仕事をしているわけではありませんから、倒木となつた枯れ木を集めて焚き木にすることになります。山を歩きながら枯れ木を探すのは骨が折れます、やつとのことで探し出し、自分の身長の半分ぐらいに手斧で小さく切り分け、丸めて、ツタで背負います。

そろそろと山を下り始めた時、ガサ！という音とともに体が地面に吸い込まれます。

ドサ！という音がしてアランは枯葉に覆われた石畳に落ちてしまいました。

イテテテ・・・と言いながら落ちた穴を見上げます。手が届くぎりぎりに穴の出口が見えています。背負つた焚き木を石畳に積み重ねれば足場として使えそうです。

アランは安心すると、周囲をあらためて確認します。

どうやら、迷宮の入り口みたいです。落ちた場所は幅、奥行きとも5人分の両手幅ぐらいですが、その一角に大人2人が並んで入れるぐらいの入り口がありました。

内部は薄暗いですが、真っ暗闇ではありません。ちょっと、入ってみることにしました。手斧をつかんで恐る恐る入り口をぐぐります。

迷宮の内部はひんやりします。壁は綺麗に切り取った石をレンガ状に積み重ねたように見えます。入り口は大人の身長ぐらいの高さでしたが通路の天井は高く身長の2倍ほどありました。

通路を進んでもぼんやりとした明かりはそのままです。どうやら壁全体が薄く発光しているみたいです。

アランがそろそろ戻ろうかと考えていると、通路の先に光るものを見つけました。少しづつ近づいてくるみたいです。

何だらうと目をこらして、その正体がわかると同時に何かが飛び

掛つてきました。思わず足で蹴飛ばします。

彼が蹴飛ばしたものはポヨンと壁にぶつかると、またしても飛び掛つてきます。

「なんだ！スライムじゃないか。」

飛んできた手まりほどのスライムを、今度は手斧切りつけます。 プルンというなんとも手ごたえの無い感触でしたがスライムは2つになりました。シューーという音とともにチャリンという音がしました。銅貨が一枚転がっています。

「これって？スライムの落し物？」

銅貨をひっくり返しながらよく見ると、普通の銅貨です。ちょっとうれしくなりました。

さらに進むと、またスライムです。今度は慎重に一撃で倒しました。これで、銅貨2枚です。スライムは倒すと消えてしまいます。 通路が十字路になつているところにきました。これ以上進むと迷子になる可能性があります。だって、迷宮つて言つぐらいですからね。

アランは入り口に戻ります。焚き木の束をほぐして焚き木を丸めたツタを長く伸ばします。ツタを腰に結びつけて、焚き木を足場に穴から出るとツタを引っ張り焚き木を回収します。だって、焚き木を取りに山に来たからには焚き木を持つて帰るのが常識ですよね。

銅貨2枚を手にしながら焚き木を背負つて皿にもどりました。 今日も、食事をしながらお母さんに一日の出来事をはなしました。 が、迷宮のことは黙つていました。病弱のお母さんに心配を掛けたくなかったからです。

## 初めての探索

次の日もアランにお手伝いの仕事はありません。

お母さんは、たまにはゆっくり休むことも仕事なんだよ。って言われましたが、もうすぐ14歳のアランには片時もジッとしていることができません。

この間見つけた迷宮の奥を探索するための準備をすることにしました。まず、川原に行つて蟻石を探します。村の学校時代には石版に文字を書く蟻石は欠かせません。村の雑貨屋に売つてはいますが、アランはこうやって探しだしました。

次に、簡単な梯子を作ります。枯れ木では折れる可能性がありますから、近所から竹を譲つてもらつて5段の足場がついた梯子を作りました。竹が余つたので、念のために自分の身長ほどの槍も作りました。武器は必要ですよね。まだ、たくさん竹が余っていますが、最後に水筒を作りました。

翌日は、また焚き木を取りに山に向いました。冬に暖炉の火が無くなるのは辛いですからね。帰りにこの間見つけた迷宮の入り口を確認します。まだ、誰も気づいていないみたいですね。

4・5日焚き木を集めましたが、アランにお手伝いの仕事は舞い込んできませんでした。冬を越すための食料は僅かに残った畑からの収穫物だけでは足りません。お母さんも、針仕事の手伝いが来ないので心配しています。

そういえば、スライムは銅貨一枚です。アランは迷宮探索を決意しました。

残り少ない雑穀の粉を練つて、暖炉で焼くとみすぼらしいですがお昼ご飯になります。数枚作つて一枚を紙で包み皮袋に入れました。皮袋には、蟻石と火打石、それに水筒が入つてます。

自宅の外で背負い籠に皮袋と梯子、槍を入れたら準備完了です。念のために手斧も腰に差しました。

山への途中で何人かの村人に会いましたが、普段通りに山に焚き木を取りに行くものと思ったようです。

誰も近寄らない急斜面の大木の下、あの田見つけた迷宮に辿り着きました。山道を大きく外れており、急斜面なのかキコリでさえも近づかないようです。

「よかつた！誰も気づいてないみたいだ。」

独り言を言うと梯子を下ろし、入り口前の石畳に降りました。籠を背から下ろすと皮袋を腰に下げ、竹槍を持ちます。

また、スライムが飛び掛つてくるかもしれません。アランは慎重に通路を進んで行きました。

「エイ！」って叫びながら竹槍をスライムに突き刺します。チャーレンと銅貨がこぼれます。

スライムが飛び掛つたところを竹槍で弾き返し、ひるんだ所で槍を刺すパターンが良いようです。これで3枚の銅貨が手に入りました。

通路を進むと、前に引き換えした十字路に差し掛かりました。アランは皮袋から蠅石を取り出します。出口はこちらの目印を床と壁に描くと、十字路を右に進みます。

次は丁字路です。真直ぐな通路と左に折れる通路があります。アランは前と同じ様に出口方向を示す目印を書いて、真直ぐに進みました。

通路を進むにつれスライムの数が増えてきました。入り口付近は、たまに1匹でしたが、このあたりでは連續で出ます。それも2匹一緒のときもあります。相変わらずのパターンで対処しますが、こういう時は長い槍は不便です。元々短い槍でしたが柄の真ん中辺をもつてコンパクトに対処します。

そうこうしている内に、目の前に扉が現れました。

「これって、チョットやばそうだよねえ。」

独り言を言いながらドアノブに手を掛けます。鍵はかかってないようです。

ギィーーーときしんだ音を立ててドアが内側に開きました。そつと中に入りました。

部屋の中は村の食堂ぐらゐの大きさです。部屋も通路と回りよつに壁が発光し薄暗くあたりを照らしています。

さうに中に入ると、バタン！…といつ音を立ててドアが閉じました。慌てて駆け寄りドアを開こうとしましたが、ビクともしません。じつはいつ時こそ冷静にしなければなりません。とりあえず、深呼吸・1、2、1、2…。

部屋に仕掛けがあるかもしれません。ゆっくりと壁伝いに歩きながら部屋を観察します。

「ん・・これなんだ！」

対面の壁を歩いていたときに足元に壺を見つけました。両手で抱えるぐらゐの壺ですが、よく見ると台座が2つあり、片方にだけ壺が置かれています。

こんな場合のお約束に、壺の台座を換えることで何とかなる場合があるのを思い出し壺を掴もうとするが、シユルシユルと蛇が腕に絡み付いてきました。どうやら壺に隠れていたようです。すばやくもつ一方の手で尻尾を掴み、振りほどいて投げつけます。

「いて・・・噛み付き蛇か！イヤなのがいたな。」

噛み付き蛇は毒は持つていませんが、噛む力が強く、尖がつた歯が沢山あります。無理やり噛み付いたところを引き剥がしたので右腕は血が滲んでいます。

蛇は鎌首を持ち上げトグロを巻いています。バネみたいに飛び掛つてくる気配満々です。

シュー！…と音を立てて飛んで来たところを竹槍で防ぎます。すると蛇は竹槍に絡みついてきました。

足元に竹槍を落とすと右足で踏んづけます。生きている竹を踏んづけているみたいな感触が伝わりますが気になません。腰の手斧を抜くと左手で蛇の胴めがけて叩きつけます。

ガツン…といつ音とともに蛇が両断されました。チャリンと銅貨

の音が部屋に響きます。

「おつとー! 噛み付き蛇は銅貨2枚なんだ!」

ちょっと嬉しくなりましたが、右腕の出血が続いているようです。血の滲んでいる範囲が予想以上に広がっています。上着を脱いで右腕を見ると、蛇の歯が何本か刺さつたまででした。無理に引っ張つた時に折れたようです。歯を抜き取つて、汗拭き用の手ぬぐいで縛ります。

右腕はちょっと痛みますが、改めて壺の中を見ると何かがキラ!と光ました。壺を両手で抱え逆さまにするとポロリッと銀色の鍵が出てきました。とりあえずゲットです。

そのまま抱えた壺の台座を変更します。

どこかで、カチリッと小さな音がしたのをアランは聞き逃しました。扉の前に行くとドアノブに手を伸ばし、引いてみます。ギィーーとドアが軋みながら開きます。

怪我したことから今日の探索はここまでと自分で言い聞かせ、出口に向つて歩き出します。途中何度かスライムの襲撃に会いましたけど、そこは、それ、なれたみたいです。

迷宮の入り口広場に着くと、ホット一息ついて、お弁当です。パサパサしたパンをほおばり、水筒の水で流し込みながら今回の探索を振り返つてみます。

スライムは何とかなる。噛み付き蛇は厄介だな。あと3日もすれば、俺も14歳だ。そろそろ将来を考えないと・・・冒険者!いや、お母さんをこのままには出来ないし・・・

服についたポケットの銅貨を数えてみます。・・・23枚ありました。

アランの村でのお手伝いは1日どんなに頑張つても銅貨10枚になる日はそう多くありません。親子2人の暮らしは慎ましいものですが、それでも、1日当たり銅貨10枚は必要です。今までは、病弱なお母さんの針仕事とアランの村のお手伝い賃とお礼に時々もらえる収穫物でやりくりして来ましたが、何時までもお手伝いではお

母さんを楽にしてやることも出来ません。それに、14歳は村では成人です。お手伝いを卒業して一人前の職業につくことが成人としての義務になります。しかし小さな村では、皆それぞれに仕事をしており、不足している職業というものがあります。農家であれば、そのまま農夫となつて、やがて親の後を継ぐことも出来ますが、アランの家には小さな畑があるだけです。

そんなことを考えながら昼食を食べ終えると、籠を担いで梯子を上り山を降り始めました。

山の出口である樅の木を過ぎると、村が見えます。空の籠を背負つて家路を辿る彼をジッと見つめる者がありました。

その日、山の迷宮から戻ったアランは、食事を前にしてお母さんに話を切り出します。

「お母さん。あと3日で僕も14歳になるんだ。そろそろ将来を決めたいんだけど……」

「……そんなになるのかしら？ 用田は早いものね。」

アランを改めて見つめます。何時の間にか大きくなつたんだわ。あの人が死んでから、どうにかこうにか親子2人で生きてきたけど……もうそんな年になつたのね。

「それで、なんになるの？ あなたの人生だから、私がとやかく言うべきものではないけれど……」

「……冒険者になるつもり！ でもやつていけるかどうか、もう一度確かめて僕に出来るようだつたら……なるよ。」

「そう……」

お母さんは反対しませんでした。いえ、出来ませんでした。彼の父も実は冒険者だったのです。若いころは、それこそ誰もが知る2つ名を持つ冒険者でしたが、

この山村を訪れ、

私を見初めて、

蓄えを元に畑を買い、

そして子供ができるまでの短かつたけれども幸せな日々。

そんな中、不幸が突然訪れました。

迷宮の中に住む魔物が、ある日突然あふれ出る時があります。アランを生んで間も無くそれは起こりました。

当時、村には数人の冒険者が滞在していた。村中の男達が冒険者の指揮のもと、押し寄せるオークの群を待ち構え防戦しましたが、何匹かは村の中に入つてしましました。あの人はただ一人でこれを迎え撃ち、全て始末しましたが、そのとき受けた傷が元で死んでし

ました。

病弱で寝込みがちな私に何がしかの仕事が入るのも、あの時の恩を村人が忘れないために他なりません。

やはり、この子もあの人の血が流れている。反対してもなんにならう。きっと村を飛び出して行くに違いない。だって、あの人のことでもだもの。

「・・・そう深刻に成らないでよ。明日もう一度確かめるんだ！僕にも出来るかどうかをね。」

アランは、何やら深く考え込んでしまったお母さんにそう言つて、駆走様！の言葉もそこそこに自分の部屋に向いました。

次の日、アランはまた迷宮に向います。今日は一つの田標があります。親子2人で生活できる金額を今日中に稼ぐことが出来るかどうか、その金額は、銅貨20枚！これが出来れば冒険者としてやっていけそうです。

・・・

夕暮れの中、アランは軽い足取りで山を降りてきました。どうやら目標の金額を得ることが出来たようです。

そんな彼を、山の出口の樅の木の根元で待っていた人がおりました。

「アラン。嬉しそう？」

急に声を掛けられ、驚いた顔を声のした方に向けると、一人の少女が立っていました。

「サリナか！驚かすなよ。びっくりしたんだからな。」

少女の名はサリナ。同じ年の幼馴染です。サリナはお嬢ちゃん子です。両親はアランの父親と同じように、あの日死んだからです。両親が居ないことで悪ガキどもの虐めにもよくあいましたが、そんな虐めを見るたびにアランはサリナを庇つてきました。無口な少女が自分から話掛ける者は極限られ、アランもこの中に入っています。

「・・・昨日も見かけた。今日も同じ。山に入つても籠が空なのは何故?」

アランは迷いました。だつてお母さん以外に迷宮探索を知つてゐる人はいません。誰かに話したら・・・一流の冒険者がどんどん押し寄せます。そしたらアランが冒険者になるつて目的が達成できなくなる可能性があります。

「そうだね。サリナには話しておくれよ。僕が山に行くのは、僕が見つけた迷宮探索のためだよ。探索して、魔物と戦つて、一日の収入が銅貨20枚。これが出来れば冒険者に成るつて決めてたんだ。」少女はアランの話をジットと見つめて聞いていました。

「・・・私も・・・冒険者に成る!」

アランは驚きました。でも、よく考えると・・・有り得る話です。サリナのお婆ちゃんは村唯一の薬屋です。いろんな薬を扱つていますが、そんなに売れるものではありません。ひょっとしたらアランよりも貧乏な暮らしをしているような気がします。サリナを良く見ると、服装は清潔ですが至る所ツギハギだらけです。靴も誰かの使い古したものを使つて補強して履いています。

それに、もう一つ気になることがあります。サリナは1ヶ月以上前に14歳になつていますから、村の中でなにかの職を探したはずです。それが決まっていないということは・・・村を出て町に働き口を探さねばなりません。でも、お婆ちゃんは年老いています。

「大変だよ。魔物も出るし。怪我、いや死んでしまうかも知れないよ。」

「判つてる。薬の知識は有るし、少しだけど・・・魔法も使える。

少女が答えます。理由はいろいろ有るのですが、14歳で暮らしながら年老いた身寄りを世話するのは大変な気がします。

「じゃあ、2日後の朝、ギルドの前で・・・一緒に冒険者になろう!」

アランは自宅に戻ると、何時ものようにお母さんと今日の出来事

を話します。

「 そうなの。あの子も大きくなつたのね。」

お母さんはそう言つと、彼女の亡くなつた両親の話をアランに聞かせます。

「 かわいそうと言つてしまえば其れまでだけど・・・貧乏さは家より酷いと聞いたことがあるわ。でもあの子はそのことに不満や不平を言つたことが無いわ。両親がいないから町に行つても、碌な職が有るとは思わない。あの子が一緒にやりたいというなら、アラン最後まで面倒見てあげなさい。」

アランも探索の仲間が増えることに不満は有りません。サリナの持つ薬の知識は、魔物との戦闘で傷を負つてもある程度は対処できることになるわけですし、魔法は魔物との戦闘に有效地に使用できるはずです。今は迷宮1階を探索中ですが、2人ですればさらに地下を田指せます。

「 それで・・・話を戻すけど、本当に冒険者を田指すのね？」

「 もちろん！」

お母さんはその言葉を聽くと席を立つて自室に戻つて行きました。そして、1本のショートソードをアランに手渡します。

「 今まで内緒にしてたけど・・・あなたのお父さんは若いころ冒険者だったの。死んだ原因是病死とあなたには言つたけれども・・・本当は、魔物と戦つて、そのときの傷が元でね。これは、あの人的情形見！生前、赤ちゃんとだったあなたにこれを見せて、大きくなれよつて言つてたのが昨日のようだわ。」

アランは無骨な造りの鞘からショートソードを抜き取ります。

この剣は、アランが初めて見るものです。今まで見なかつたことから、お母さんの箪笥の奥にでも仕舞つてあつたのかも知れません。長い間手入れもされていなかつたでしょけども、刃には一点の墨りもありません。よほどの名剣なのかも知れません。

「 いいの？なんか僕の手には勿体無いと思つけど。」

お母さんはそんな彼に黙つて頷きます。

約束の朝です。アランは14歳になりました。

何時ものズボンと上着には何の変化もありません。でも、彼の腰の後ろにはショートソードが括りつけられています。何故か彼には何時もと違う朝に思えました。

ギルドは村の大通りの一一番大きい建物です。隣はよくお届け物をする食堂があります。

「やあ！待った？」

アランと同じように何時もの服装でギルドの前に立つ少女に声を掛けます。

サリナはフルフルと首を振るとギルドのドアを開けて中に入ります。アランも慌てて後を追いかけます。

## ギルドと2人の冒険者

朝早くのギルドは閑散としてました。まだ早いのか冒険者の姿はありません。

ドアを開けて真直ぐ前には、カウンターになっています。右手は数人が着座できるテーブルセットが3つ。左手には大きなボードがあり、アランの顔程の注文書がまばらに掲げられています。

サリナの後を追いかけてカウンターに向います。奥の事務所から2人を見かけたお姉さんがやってきました。

「ようこそ、ギルドへ！私たちトリエット・ギルドは貴方達を歓迎します！」

お姉さんの挨拶は決まり文句みたいですが、様になつてます。ちよつと呆気にとられた2人でしたが、ユリアに足を踏まれたアランはお姉さんを前にします。

「実は・・・僕たち、14歳になりました。確か、ギルドの認定は14歳で良いんですね？登録したいんですけど・・・」

「はい！OKですよ。ではここに名前と出身地・・・トリエットでいいわよ。それに、何か特技があればこの欄に書いてね！」

結構、テンションの高いお姉さんです。言われるままに書類を作成していきます。

「できたかな？・・・うん。良いわよ。問題なし！・・・へへ、サリナちゃんは魔法が使えるんだ。」

2人の作成した書類を確認しながらそんなことを言つてます。最後に手の平ほどのでつかい印鑑をドカンと押しました。次に、カウンターの下から何やら水晶玉を取り出しました。

「さあ、今度はこれよ！両手でこの玉を掴んでみて！」

？？？を頭に浮かべながらも2人は代わる代わる掴んでみます。水晶玉を掴むとヒンヤリとした手触りが伝わります。突然ビリッと手先が痺れます。それと同時に水晶玉がピカつ小さく光ります。

「ビックリしたかな？でも、これで2人の能力が判るんだよ。ちよと待つてね。」

お姉さんはそう言うと水晶玉を持って事務室に戻っていました。さて、次はどんなことをするのかなと思いながら待つていると。お姉さんが戻つてきました。何やら手に持っています。

「ハイ！以上で登録終了。これはアラン君のね。こっちはサリナちゃんの。カードを無くさないように鎖で首から下げたら良いよ。」

そう言いながら、2人の首にカードを鎖で下げてくれました。

「それから、このカードは単位の基本になつてているから覚えておいてね。詳しくはこのマニュアルを読むこと…」そういうつて小さなノートを2人に配ります。

「以上で終了です。何かご質問は？」

なにやら一方的に始まつて、終わつてしましました。いろいろ聞きたいことはありますけど……

「一つ、いいですか？」

「はい！どのようなことでしょうか？」

お姉さんがにっこりと微笑みます。

「この村のはずれに迷宮がありますよね。それとは別に、違うところに迷宮をみ……」

お姉さんがあわててアランの口を閉ざします。そのまま、アランの襟首を掴むとカウンターの中に引き込みました。

「ちよつと来なさい！」

今までと全く違うお姉さんの態度にアランは頷くだけでした。そのまま奥の事務室の方に連行されていきます。サリナはヨックヨイシヨと言いながらカウンターを乗り越え2人に続きます。

2人は事務室を通り越した会議室みたいなところへ通されました。「ここでちよつと待つて貰うわ。マスターを呼ばないと……」やがて、お姉さんが横幅のある小人のようなお爺さんを連れて戻つてきました。ドワーフ族！と小さな声でサリナが呟きます。

「そう緊張するでない・・別に取つて食うわけではないんでの。・

・詳しい話をしてくれないか。」

2人に席に着くように言いつと話を切り出します。

アランは今までの経緯を話しあげました。発見のあらまし、地下の迷宮、スライムとの戦い、壺を使ったカラクリ・・・マスターは静かに聴いています。

アランが話し終えた後は静かに考えています。

「わしが知っている内では2番田じや。マスターになつてからは初めてじやがのう。」

マスターはパイプを取り出すとプカリと煙を吐き出します。

「じゃから、1番田と同じ扱いとする。いいか、若いの。良く聞いておくのじやぞ。まず、発見者はアランと認定する。そして、発見した迷宮をマウンント・ワンと命名する。マウンント・ワンへの探索はアランが20階層をクリアするまでは何人も入ることを禁止する。これは後でわしが封印を施そう・・・なに、封印してもアランのカードをかざせば本人及び本人と同行するものは入る事は問題ない。最後に、アランがマウンント・ワンの地図を作りこれをギルドに提出すること。地図は20階層まででよい。それ以降の階層の地図を作成した場合は、ギルドが買い取りを行う。1階層当たり銀貨10枚でよいかな。最後に、アランが20階層をクリアした段階で5階層までの地図を冒険者の求めに応じて売り出すこととする。この場合、手数料として、売れるたびごとに銀貨一枚をアランに貰える。」

こんなものかの・・・といいながらマスターは席を立ちます。アランは呆気に取られて聞いていました。

「そんな顔しないで。後で正式な契約書を作つて渡しますから。優しいお姉さんに戻つてます。」

「いったん戻つてから、出かけよつと思つてますけど・・・良いんですね？」

「ハイ。大丈夫です。それと言い忘れてましたけど・・・一週間に一回はギルドに顔を出してください。生存確認等の手続きがありますから、それもさつきのマニュアルに書いてあるんですが、皆

さん忘れる方が多いんですよ。」「

2人は一旦、アランの自宅に戻ることにしました。急斜面にあるマウント・ワンの入り口には、サリアの今の装備では心もとないところがあります。最低でもズボン装備です。スカートではいけません！

アラン達が自宅に戻るとお母さんがお茶の用意をして待つていました。

ちょっと待つてとサリアに言つてアランが自室に向います。なにやら探し物のようです。

お茶を美味しそうに飲むサリアの前にお母さんは座ります。改めてサリアを見ると、貧しい身なりですが清潔な服装です。ふと、視線を落とすと、少女の脇には魔法使いが使う杖があります。確かあれば・・・

「お婆ちゃんにもらつた！」

お母さんの視線に気付いてサリアが答えます。

そうだ！あの杖だ。あの時は、お婆ちゃんもまだ現役には負けないって言いながら、あの杖を振るつて魔物に全体攻撃魔法を打ち込んでいたわ。

アランが父の残した剣を使つよつてこの子も縁者の杖を使って冒険者になるんだわ。

バタンとアランの部屋のドアが開くと、アランが何かを持つきました。

「サリア、これを使えよ。マウント・ワンは急斜面だ。その装備じゃ行けないぞ！」

「わかった！」

サリアは席を立つとアランから服を受け取ります。いきなり服を脱ぎだすサリアを慌てて止めると、アランの部屋に押し込みます。

「着替えたら出でこいよ。」

お母さんに向つて、フー、とため息を付きます。あらあら仲がいいですことなんて言いながらアランにお茶を入れます。こういう時

の「クン・・アツチッチはお約束ですよね。

「できた！」

サリアがアランの部屋から出てきました。ダブダブです。上着から手も出でいません。

お母さんは、裁縫箱を出すと大急ぎで手直しをはじめました。ズボンをたくし上げると、くたびれて紐で無理やり足に固定した靴が顔を出します。しかも、靴下を履いていません。ここまで・・貧乏だったのと他人ながらも涙が溢れます。

急いで、アランの小さくて履けなくなつた長靴を探しだし、ダブついたズボンの裾を切るとその布でサリアの足を包みます。即席の靴下の出来上がりです。長靴はピッタリとサリアの足に合いました。次に、シャツと上着です。どうせ、息子のものですし、思い切つて余分な箇所を鋏で切り取ります。

「こんなものかしら？・・どう？動きやすくなつたでしょ。」

サリアは小さく頷きます。

「最後はこれね！」

お母さんは暖炉の上から小さな包みを運んできました。包みを開くと・・・緑色が少し薄れたマントです。フードも付いてます。

「私が娘時代に着ていたものだけど・・・使って頂戴！魔法使いにはマントが一番似合うわ。」

小さくお辞儀をしてマントを受け取り羽織つて見ます。ボーグイッシュな姿が隠れて立派な魔法使いに見えます。

「良く似合つわ。・・・アランをたのみます。」

「ありがと。」

ぶつかりますが、サリアのお礼にお母さんの胸は熱くなりました。

「では、出かけなさい。でもちゃんと元気に帰つてくるのよー。」

「「ハイ！」

2人は元気良く出かけて行きました。

## サリナの力

2人は山に向います。

今日のアランは籠を持っています。今日からは冒険者なのです。竹の槍を杖代わりに山道をそれでマウンテン・ワンに向います。

「急斜面だけど、大丈夫?」

「いい。今日は靴が痛くないもの。」

もともと華奢なサリアには、急斜面でも体重が軽いので苦にならないようです。

斜面の雑木を掴みながら、すべり落ちないように氣をつけて進みます。

「ここが、そうだよ!」

入り口広場の梯子までたどり着いたアランは、少し遅れて付いてきたサリアに説明します。

「梯子持ってるから先に下りて!」

小さな広場ですが、迷宮に入る前にちょっと休憩です。お母さんが作ってくれた焼き菓子を2人で分けて食べます。

「おいしい・・・」

そういうてサリアがアランに微笑みました。

入り口より中に入ります。先頭はアラン、後ろがサリアです。

「ちょっと、暗いけど・・・見えないことはないんだ。ずっと奥までこんな感じだよ。」

「ライト!」

杖を上げてサリアが呟きます。

2つの光の玉が杖から浮かび上がる、1つはアランの前方5歩程度の所に移動していくと、アランと天井の中間の高さで止まりま

した。もう一つはサリアの後方に回ります。十字路に移動してこきます。

「移動に合わせて、着いてくる。」

サリアはそう言つと移動を促します。

昼夜のように明るくなつた迷宮は、ずっと奥まで見通せます。

「ちょっと待つて！」

十字路に差しかかるとしていたアランが声をかけます。十字路の左側で何かが動きました。

竹の槍を何時ものように真ん中で持つとゆつくつと近づいていきます。

「いた！」

何時ものスライムです。左通路に飛び込むと同時にスライムを槍で叩き、床に打ち付けられたところを槍で刺します。

ブシュツと音がして銅貨が一枚こぼれます。

「明かりがあると助かるね。ほら、魔物を倒すと何故だかお金を落とすんだ！」

サリアに振り返つて、銅貨を渡します。『じやじやと服の中に仕舞い込みました。』

「道が2つある。」

「右側の道はもう見たんだ。小部屋と行き止まり。奥に進むとスライム以外に噛み付き蛇もいるから注意してね。」

「蛇・・嫌い！」

2人は左側の通路を進みます。スライムと何度か出会いましたが、周囲が明るくなつたので、いきなり飛び掛られることはありません。

少し進むと十字路です。

出口の方向を何時ものように蠅石で床と壁にアランが書いています。サリアが布に炭で何かを書いています。

「何をしているの？」

「地図…」

先程のアランの話と今の状況を簡単にマッピングしているみたい  
です。

そう言えば、ギルドマスターに地図を作れって言われてました。

十字路を左に進みます。しばらく歩くと通路の先に扉が見え  
ました。

扉を開こうとしましたが動きません。扉をよく調べるとドアノブ  
の下に小さな鍵穴があります。

「この前来た時に見つけた扉の部屋で、これを見つけたんだ。」

アランは、銀色の鍵を取り出しました。鍵穴に差込回します…。  
カチリ！ドアの鍵が開いたようです。

扉を開けて、そつと中を伺います。突然の明かりに驚いた何かが  
ザザー！と動く音がします。何かが沢山いるようです。

アランは急いでドアを閉じました。

「どうして。」

小さな黒い玉を持つサリアがアランを脇にすると、ドアの前に  
立ちます。

黒い玉についた紐を片手で引っ張ると、急いでドアを開け投げ込  
みました。

バーン！という音がして、ドアの隙間から鋭い光が漏れでます。

「爆光球・・攻撃力0、しばらく戦闘不可。」

サリアが先頭になつて、部屋にはいります。こんなに過激だった  
つけ？と首を振りながらあらんが続きます。

部屋の中は数匹の角トカゲと同じ位の噛付き蛇が目を回してます。  
片つ端から竹槍で止めを差します。

「これ？」

サリアが銅貨を拾いながら気付いたものをアランに知らせます。

部屋の奥まつた所に小さな祭壇があり、祭壇の奥になにやら小箱が安置されています。

アランが蓋を開けると、銀色の指輪が入っていました。

「呪いの指輪かもしだい。後でギルドで鑑定して貰おう。」

サリアが首をコクンと了解の仕草をしました。

この部屋を隅々まで調査し、他に何もないことを確認して2人は部屋を出ます。

先ほどの十字路に引き返し、今度は真ん中の道を歩きます。  
通路を進むと途中で直角に折れ曲がり、その先は行き止まりでした。

行き止まりの壁際には壺が2個置いてあります。慎重に近づき槍で壺の中をつついてみます。

何もないよ！とサリアに振り向いた時、サリアがいきなり杖を構えました。

「メルト！」

杖から拳ほどの火球が飛び出るとアランの足元に着弾します。ジュツ！という何かが焼かれる音がします。恐る恐るアランがしもとを見ると、焼け焦げた噛付き蛇がいます。見る見るシューと音がして消えていきます。

「壺の影にいたの。」

サリアが銅貨を拾いながら言います。

また、十字路に戻ります。最後の右側の通路です。  
通路は右に、左に折れ曲がりながら続いています。

曲り角には、スライムや噛付き蛇が待ち構えていましたが、通路が明るいので、大曲しながら油断せずに進むことで不意を突かれることはありませんでした。

少しづつ迷宮の探索に慣れてきましたようです。

アランはやはり、仲間がいるつてことはいいな！と思いました。

さらに進むと通路が広がりました。

行き止りかな?と思つたらちょっとした広場です。じぶんの家の食堂ぐらいあるな。等と考えていると、サリアがこちらを向いて、かべの一角を指差しています。

急いでサリアの所に行くと、壁の一部が二重になつていて壁の間に下の階に下りる階段がありました。

一階部分の探索が終了したのです。

地下2階からヒンヤリした風が吹いてきます。

「今日はここまでにしようか?」

サリナは分かつたといつよに首をノクンと振ると、しゃがみこんで布になにやら書き付けます。1階の地図をまとめているようです。

サリナの作業が終わつたのを合図に来た道を戻ります。

途中、何回かモンスターを退治すると迷宮の入り口に戻つてきました。

昼前に迷宮に入りましたが、出てみるとお口様が西にかなり傾いてます。

お母さんが持たせてくれた焼き菓子を2人で分けると遅い昼食を取ります。水筒の水も2人で分けて飲みました。

山を降り、村に入る手前でサリナが呼び止めます。

「止め!」

今日の冒険者としての収穫です。サリナはマントの布に銅貨を広げます。

全部で53枚ありました。

「朴達の生活も苦しいけど、迷宮の地下に降りるには装備が心もとない気がするんだ。3等分してサリナと僕、それに装備用の貯金

にしたいけど・・・いいかな?」

「いい!」

アランはささっと銅貨を分けます。そして18枚の銅貨をサリナに渡します。

「僕も18枚貰うよ。残りの17枚は明日、ギルドに預けよう!」  
サリナが頷きます。

村に入るとサリアに別れを告げます。

「では、お休み!明日の朝来てね。」

「分かった!」

2人はそれぞれ自宅に戻りました。

## 中途半端な武器

あぐる口。

トントンと扉を叩く音に気が付いてアランは扉を開きます。

「来た！」

「おはよう！」

「待つて！ 急いで用意するから。」

片手剣を腰の後ろのポーチに並べて取付け、水筒をベルトに結び、お母さんの作ってくれた薄い焼きパンをポーチに入れます。お母さんに行つて来る！と告げ、竹の槍を取ると家を出ます。外では、サリナが待つていました。

あれ？ うとアランはサリナの姿が昨日と少し違つて気が付きました。

ギルドに向う道筋、ずっとその違いを考えていましたが、ギルドの前でやつと分かりました。

昨日アランのお母さんが挟みで短くした袖や裾がちゃんと繕つてあつたのです。それに、昨日はなかつた布の小さなバックを下げています。

「あのう・・・鑑定って出来ますか？」

アランがそう聞くと、出来るということです。サリナは昨日の指輪をカウンターのお姉さんに渡します。

「ちょっと待つてね！」

お姉さんは指輪を持って事務所に入つていきました。

事務所で誰かと話し合つ声がしばらく続いていましたが、やがて、マスターとは違つてワーフのおじいさんが出てきました。

「おめえらが、これを持ってきたのは？」

「そうですが・・何か問題でも？」

「いいや、そうじやねえ。近頃あまり見かけなくなつたのでな。これは、守りの指輪じゃよ。まあ、効果は低いがな。転んでも怪我がない程度でしかない。あまり過信しないことじやな。」

そう言つと、お爺さんは事務所に入つて行きました。

「値段も高くないそうよ。レアな金属甲冑並の守りの指輪なら、金貨50枚以上するらしいけど、これはせいぜい皮の鎧程度かそれ以下かつてところらしいから・・・銀貨2枚程度らしいわ。

「初めて見つけた宝物ですから大切に持つてますよ！・・・ところで、鑑定料はどうなるのでしょうか？僕達お金はあまり持つてないんですけど・・・」

「珍しいから、サービスだつて！ 良かつたわね。」

思わず2人の顔がほころぶ。

「ありがとうございます。」

礼を言つてギルドを出よつとした時です。

「ほれ！若いの、ついでだ、持つてけ！」

おじいさんが何かをアランに放ります。

掴んだ物は、棒の先にナイフが付けられたものでした。危なくないうように、刃先には皮のケースが付いてます。

「わしが若い時に作ったものだが、誰も欲しがらん。まあ、中途半端というわけだな。やるから使ってみろ。それと、判らん物は持つて來い。それが、条件じゃ！」

竹の槍と比べて、頭1つ分くらい短かいですが、手のひら2つ分くらいのナイフが先端に付いてます。思ったより軽く、アランでも簡単に振り回せそうです。

「いいんですか？ありがとうございます。」

「こんどこそ、2人はギルドを後にした。」

マウント・ワンへの道すがら、守りの指輪をサリナに渡します。

「いいの?」

「サリナの防御は僕より低いから持つてて。」

アランの装備も丈夫な布の服程度でしたが譲ることにしました。

今日は地下2階の探索です。

1階フロアを地図通りに進み、階段まで辿りつきました。サリナの魔法【ライト】はフロアが違つても継続するようです。明るく照らされた階段を2人は下りて行きます。

アランは、おじいさんに貰つた武器を装備します。

途中で噛付き蛇と戦つて、この武器が中途半端だと言つた意味が分かりました。

槍より短いので振り回しやすいのですが、先端のナイフの刃先が短いのでなかなか切ることが出来ないのです。

切ろうとするとツバの部分に当たつてしまつのです。また、突こうとしても、力がります。さらに槍より短いので、杖のように持つとちょうどナイフの柄を握つているような感じです。

刃先のカバーを外しているので、ちょっと危険です。

でも、うまく当たれば、竹の槍より数段威力があるので、アランは満足しています。

道が別れる場所には印を描いて、それをサリナが布に記入していきます。

「ここは、さつき通つた。こつち!」

サリナが現在地を確実に把握しているようです。

アランは明るく照らされた迷宮を一步一歩進んでいきます。

道が直角に曲がったところでは、光球を先に行かせて、アランが

そつと顔を出して安全を確認します。

そんなことを何度も繰り返した時でした。

「・・・！、いる。」

光球に気がついた魔物がこちらに向ってきます。

アランの声にすかさずサリナは、かばんの中から何かを取り出すと、角の向つに投げつけます。

バーン！といふ音がして、角の先が強い光に満たされます。

「とりあえず、投げといた。」

やり方は過激ですが、アランは飛び出ると、まだ目を回している魔物に止めを刺します。

魔物は人型をしたトカゲです。鼻先に小さな角がある（角トカゲ）です。

トカゲは以外と素早い動きをします。

魔物も同じように素早く動き、攻撃してきたらと思うとちよつと不安になりました。

胸元にグウツ！と体重を掛けてナイフを突き刺すとシューと魔物が消えて行きます。

「・・・ちょっと、刃先が鈍いのかな？」

何か言つた？って言うような目で、銅貨を集めていたサリナがこつちを見てます。

いや何でもない。ってアランは答えると先を急ぎます。

しばらく歩いていくと階段を見つけました。

「これで、地下3階に行けるね！」

後ろを歩いていたサリアにそう言って振り返ります。

そうねーの短い返事を期待してましたが、サリナは向やら地図を睨んでいます。

「どうしたの？」

「ここ、行つてない。」

アランはサリナの示す地図を見てみます。

そこは、さつき入った部屋でした。噛付き蛇が1匹だけいて、部屋には特に何も無かつたようでしたが・・・

「ア！・・・」

そういうえば、その部屋には、場違いな本棚があり、2人でじつこらしょ！って動かしてみると、狭い穴が奥に続いていました。

後で来よう。つて先を急いだ事を思い出したみたいです。

「もどって、確かめよう！」

2人はさつきの部屋に急いで戻ります。

さつきの部屋の扉を恐る恐る開けると中を確認します。時間がたっていますから、魔物が戻つている可能性もありますからね。本棚は壁から移動したままです。

早速、穴をもう一度確認します。

人が這いすつてどうやら先に進めそうです。

どうしようかとサリアを見ると、魔法で光球をもう一つ作ったようです。

「どうしてー？」

アランを無理やり脇に退けると、光球を穴の中に飛ばします。

穴はさほど奥行きがないようです。光球はスウーッと穴をくぐつて、奥の部屋みたいな空間に吸い込まれた行きました。

先の部屋からぽんやりと穴の中が照らし出されます。

「よし、様子を見てくる！」

ちょっとまって、とサリナに告げて、アランは穴を這いずっといました。

あなたの出口には、先ほどの部屋と同じ位の部屋がありました。あなたの出口は床から腰ぐらこの高さです。

ヨイショー！と穴から出ると、素早く周囲を確認します。・・・

なにも動くものは居ないようです。

「大丈夫。入って来いよ！」

穴の入口で待ってるサリアに声を掛けます。

待つこと直ぐに、サリナは穴から這い出しあきました。2人で部屋を注意深く観察します。なにも無いようです。

「あれ！」

サリナが何かに気が付いたようです。

それは、壁の一角に作られた祭壇のようです。

奥行きの無い小さな窪みに、動物を模つた1対の石像が鎮座しています。

「でも、ちょっと変だよね。片方が別を見てる。」

石像の片方は、もう一方を向いているのですが、別の石像は窪みとなつた壁を見てます。

「ひょっとしたら！」

アランは壁を向いた石像を動かして両方の石像が互いに向き合つよつとしました。

「ガガガホーと音がします。

2人が振り向くと部屋の壁の一角が横に開いていきます。新たな部屋の出現です。

その部屋は不思議な雰囲気の部屋でした。

最初から明るいのです。

中央に裁断らしきものが有り、両側に松明が燃えています。だれも居ないのに何で？疑問を持ったアランが松明に近づきました。

「これ、燃えてないぞ！・・・中の何かが光ってるんだ！！」

サリナがその声に、松明を観察します。

「魔法・・中の結晶が魔法の炎を作ってるの。」  
なるほどね。と納得して、祭壇に向います。

祭壇は2段に石を積み重ねた造りです。

誰かが、昔の誰かが捧げたのでしょう、花束がドライフラワーのようになっています。

その、中央に石棺があります。

石棺は複雑な彫刻が細密に彫られており、それだけで神々しい雰囲気を持っています。

「お墓かなあ？」

「開けてみる！」

サリナが祭壇を登つてきます。アランも慌てて着いていきます。

石棺は重く2人の力ではビクともしません。

一じり開けようともしましたが、精密な造りなのでしお、ナイフの刃さえも入るような隙間もありませんでした。

「わかった！」

石棺の周囲を、その模様を調べていたサリナでしたが何か発見しました。

「下がつて！」

アランはサリナに従つて祭壇を降りました。

「我、光の世界より訪れたり、闇の祭壇眠りたる者よ、その眠りを解き、姿を現さんことを、我は願うなり・・・」

「呪文なの？」

「書いてあつた。」

石棺の模様の中に呪文が彫り込まれていたようです。

突然石棺の蓋の中央が割れ、中から光が漏れ出しました。

ズズー・・と両側に石が擦れる音をたてて分れていきます。

ゴトッつと音をたてると、蓋は石棺にもたれるように落ちて止まりました。

パーンと光が強くなります。

光の中から人影が・・・石棺の中から起き上がるよう身を起しました。

人影は周囲をひとしきり見ていくようでしたが、アラン達を確認すると、アラン達に姿を向けました。

人影は、段々と輪郭を現します。アラン達が見たことも無い服装で、見た感じではとても偉い人に見えました。

「私の眠りを覚ましたのはお前達か？」

突然、アラン達の頭に強い思念の言葉が入つてきました。

2人は驚いて顔を見合わせましたが、偉い人には逆らえません。

「はい。」

とりあえず正直に答えます。

「ここは、閉鎖された空間のはず？・・・まあ、入つてきたからにはしょうがあるまい。」

「ところで、世界は平穀かな？」

アランには平穀の意味が分かりませんでしたが、サリナが代わつ

て答えます。ここは平穏だと・・・  
ひとしきり問答が続きます。

「どうやら、かつてここには大きな王国があつたようです。石棺の人は、その国の偉い神官だつたそうで、呪いを受けた姫が亡くなつた時、不憫に思つた神官がここに一緒に入つたそうです。  
彼は死んで埋葬されたのではありませんでした。自ら望んで生きたままこの石棺に入つたそうです。

「どうか。今はこの神殿を詣でるものも居ないのか。・・・まあ、それはよい。それが時の流れというもの。」

「しかし、お前達はまだこの神殿の先を行くのだな？」

アランは頷きました。

「それなら、姫を頼む事にしよう。私は姫を救えなかつた。お前たちならばあるいは・・・」

「これは、石棺の鍵・・・これなくして姫の石棺は開かぬ。・・・  
それと、そこの娘よ。」

アランは鍵を受け取ります。小さな金の鍵です。

サリナは、なに?つて感じで神官を見てます。

「お前は低位ではあるが魔法を使うことができるな?私の力を授ける!」

そう言つたとたん、神官の周りに何かがモワ!つと溢れます。それは大きな塊となつて神官を離れ、サリナの体に吸い込まれていきました。

「お前に与えたのは癒しのわざ。怪我等を治す(ヒール)と毒に効果のある(パラール)だ。お前達の旅の助けになろう。」

最後にそう言つと、神官の体が少しずつ消えていきます。  
神官の体からの光が弱まるにつれその姿がどんどん掠れていきます。

「秘密の部屋・・・石棺の中は空っぽ・・・  
サリアが地図に部屋の位置を記載しています。  
これで、地下2階の探索は終了しました。  
2人は、地下に降りる階段に急ぎます。

## トカゲ戦士と武器の改良

マウント・ワン地下2階の探索を終了して、地下3階への階段を恐る恐る降りていきます。

2人は降りた途端に思わず立ち止まってしまいます。 だつて、このフロアは途轍もなく広い、一つの部屋だったのです。

「炎球【ファイア】！」

サリナが部屋の奥に向って火の玉を放ちます。

ビューンって周囲を明るく照らしながら飛んでいくと奥の壁に当たつて一瞬あたりを明るくして消えました。

「広い・・・」

「そうだね。 それと柱がある見たいだよ。」

さて、どうやってこのフロアを探索しようと悩んでいたと、サリナがバックの中から、ランプを取出しました。

階段の欄干に紐で縛り付けます。 ランプの下の突起を操作すると、ランプに明かりが点きました。

どうやら、ランプの中の魔道石が光っているようですね。

「田舎！」

「うん。 これで、迷子にならずにすむね。」

とりあえず、サリナがファイアを放った方向に進みます。

壁に当たると、右に折れて進みました。 先ずは一周して全体を把握するつもりです。

遠くにほのかにランプの明かりが見えます。

ランプの明かりの方向と、途中の柱、それに2人が歩つた凡その歩数で部屋の大きさがある程度把握できます。

2人の歩く周りは、サリナの光球【ライト】により明るく照らさ

れています。

「！」

前を歩いていたアランがサリナの前に手を上げて、停止を合図します。

柱の影で何か動きました。

アランは杖の先にあるナイフのケースを抜いて杖の中間を持ちます。サリナも【ファイア】を何時でも放てるよう杖を握り直します。柱の影から人影のようなものが飛び出します。

間髪を入れずに【ファイア】が放たれ、アランも杖を振り上げて走り出しました。

走るアランの真近で【ファイア】が弾けます。

その時アランが見たものは・・皮鎧を身に着け、片手剣を持つた一本足で立つトカゲ戦士でした。

【ファイア】が命中したせいで皮鎧が焼け焦げ、肉の焼ける嫌な匂いがします。

そんな状況をまるで感じないよう、トカゲ戦士はアランに襲い掛かります。

斜めに切り下ろされた片手剣を杖で上に弾き、回し蹴りを連携で叩き込みます。

しかし、トカゲ戦士はアランより少し大きい体格なので、その程度ではびくともしません。

危うく足を掴まれそうになり慌てて体制を取り直します。

そこに、【ファイア】が再度トカゲ戦士に当たります。

前回とほぼ同じところに当たったのでしょうか、トカゲ戦士は痛みを堪えるように一瞬前屈みになりました。

「ヤア！」

その隙を逃さず、アランは渾身の力を込めて、トカゲ戦士の首の付根にナイフの刃を思い切り叩きつけました。

シュー・・・

トカゲ戦士が消えていきます。そして片手剣が残ります。

「ありがとう・・でも、この武器じゃちょっと心もとないね。」

「帰る?」

2人はマント・ワンを出ると村に帰ります。

村では先ず、ギルドです。

アランはここで確認したいことがあったのです。

カウンターのお姉さんに、指輪の鑑定をしてくれたドワーフのお爺さんを呼んで貰いました。

「おう、坊主か。何か見つけたのか?」

ドワーフのお爺さんに話します。

貰った杖は使いやすいんですが、ナイフの切れが今一つであること、斬り込む時に刃が短いのと軽いので威力があまり無いこと・・・

「だろう・・やはり中途半端ということだな。」

「でも、使いやすいのは本当なんです。もうひとつとナイフの長さがあつて、重量が増せばと思つて来たんですが・・何とかならないかと思つて・・」

「ふ〜む・・所で、お前の持つてるものは片手剣だな?それを寄越せ。そして明日取りに来い!」

お爺さんは何を思つたか、アランが迷宮から持ち帰つた片手剣を要求しました。

それを受取ると、事務所ではなくギルドの奥のほうに行つてしましました。

「ガルムさんはね。昔は王都で有名な鍛冶屋をしてたのよ。今でも気が向いたら武器を造るんだけど・・アラン君、気に入られたみたいね。」

お姉さんがお爺さんの消えた奥を見て言いました。

次の朝、2人でギルドを尋ねます。

少し遅い時間なので、ギルドに他の冒険者はいません。皆さん依頼を受けて出かけたみたいです。

「あら、遅かつたわね。ちょっと待つて！」

お姉さんが事務所に向います。

「おう、来たか。これを持って見ろ。」

アランは、短くズングリした槍を受け取りました。ちょっと重いです。

かなり変わった槍です。第一、穂先がありません。上の方が片腕の長さ程、金属の板が出ています。でも、刃は付いていません。

呆気にとられて武器を見ているアランをお姉さんは「一〇一〇しながら見ています。

「どうだ！お前の欲しがつてたものだ。」

「その柄についている輪の下を持つて・・・そりだ。そしてもう片方の手で輪を下げてみろ！」

すると、柄の上のほうに出ていた板がバチンと跳ね返れるように柄の上のほうに開きました。

そして、姿を現したのは・・・柄の長い片刃の片手剣です。

柄の中ほどを持つて構えてみます。・・・問題ありません。

ホールの方に少し移動して、突き、斬りとナイフ付き杖での戦闘動作を一通り試してみました。

絶妙のバランスです。最初、重いと思いましたが、それほど気になりません。

「すごいです！・・・でも、僕達お金があまり無いんですけど・・・どれほどでしょうか？」

「なに、金等いらんわ。・・・今度来る時、感想を聞かせてくれ

ればそれでいい。」

お爺さんはそう言って事務所に入つていきました。

「よほど、気に入られたみたいね。その武器・・柄の部分だけ、鉄と同じ位の強さがあるの。その値段だけでも、長剣が1本買えるぐらいよ。」

「がんばってね！」

手を振りながら送り出してくれたギルドのお姉さんを後にして、2人はマウント・ワンを目指します。

## 地図作成と注意力

何時ものよつこ、朝早くサリナがアランの家を訪ねます。お母さんは何時ものよつこにサリアを中心に入れ朝食を食べているアランの隣でお茶をこじ馳走します。

アランがよつこを食べ終えてお茶を飲んでいると、お母さんが、2人にお弁当を手渡します。サリナは大事そうにカバンにそれを詰め込みました。

2人のカバンには予備の食料や、薬草、毒消し等と水筒も詰まっています。今日は、地下3階を攻略し、更に地下4階も出来れば・。と思つてゐるからです。

「いってきます！」と家の戸口で挨拶してマウント・ワントに歩き出します。

マウント・ワントに着いたら、早速地下3階の階段まで一直線に歩きます。途中、スライムや噛付き蛇が出ましたが、アランの新しい武器で叩きつけると一発で倒すことが出来ました。

「いよいよだね。」

サリナが軽く頷くのを確認して、地下3階への階段を降りていきます。

地下3階フロアに着くと、前回と同じように壁に部屋を確認します。降り口を魔法のランプで目印にし、柱の影に注意しながら進みます。

アランは杖代りに使っていた武器の留金を外して片刃の剣を飛び出させます。柄の極めて長い両手剣のような武器ですが、剣自体は片手剣の刃の長さです。でもアランは使いやすさに感じています。

しばらく進むと壁に当たります。また右に折れて歩き出します。どうやら壁から20歩ぐらいの距離で壁に平行に柱が立つてゐます。

柱は直方体で1辺がアランの両腕を伸ばしたぐらいの幅です。

サリナは【ライト】の魔法で3個の光球を出し、前後に1個づつ浮ばせると同時に、もう1個をランダムに部屋の中を移動させています。

こうすることで、魔物の不意打ちを避けられるかも知れませんし、部屋の全体像を確認するためにも役立ちます。

部屋の1辺に幾つ柱があるかを確認するため、地図と部屋の柱の位置関係を見ていたときに、他の柱と違う柱が有ることに気付きました。

とりあえず、その柱を地図上に書き込んで置きます。

部屋の4辺を歩きました。

柱の影に小さな箱がありましたが、中には銀貨が2枚はいっています。

ただけです。

部屋の中心部も歩いてみましたが、何もありません。

今回は、魔物さえも見当たりませんでした。

「何もないね。何か気がついた?」

アランの問いかけに、サリナが柱の1本を指差しました。

「あれ! 他と違う。」

アランには違いがよく判りません。でもサリナが違うと言つからには何か有るはずです。

サリナが示した柱をよく見ようと近寄った時でした。

「ガウウ・・・

低い唸り声を上げてトカゲ戦士が飛び出しました。

広い部屋を満遍なく探したはずなんですが・・何処に隠れていた  
ようです。

「ウオオリヤー！」

アランは斜めに持つていた武器を振り上げながら柄の石付きで、  
剣の一撃を弾きます。

振りかぶった武器をトカゲ戦士に叩きつけると・・・柄の長さで  
スピードの増した剣の刃が相手の首筋に命中しました。

「ズン！」

鈍い音と共にトカゲ戦士の首から血飛沫が上ると床に倒れ落ち  
ました。

シューっと音を立てて、トカゲ戦士の亡骸が消えていきます。そ  
して、チャリンと硬貨が数枚転がります。

改めて問題の柱を調べます。

「他と同じじゃないかな？」

「違う。他は、床から柱が伸びてる。これは、台座がある。」

そう言われて見れば、確かに床に指の幅位の高さですが台座があ  
ります。

台座をよく見ると、硬貨程の大きさの突起が台座の一辺に付いて  
いました。

足で踏んでみます。

ガコン・・ガコン・・ガコン・・・・・

柱で囲まれた部屋の中心部が正方形に、階段状に内側に向って落  
ち込み始めました。

そして、その中心部に新たな地下へ降りる階段が出現します。

「降りるよ！」

サリナは小さく頷くとアランの後を追います。

地下4階は、迷路のよつた通路が続きます。

先ずは全ての十字路とT字路を左に進みます。もちろん分岐路には田印を付けて帰路が判るようにしておきました。

「此処、やつを通つた。」

「え！」

分岐路の片側を見ると、帰路を示す田印があります。

サリナが作った地図を見ると、少し位置がずれていますが、曲がった回数と方向で確かに此処と繋がっているようです。

「こここの距離がもう少し短かつたんだな・・・サリナが地図作つてくれて助かつたよ。」

いい。なんて言つてますけど、褒められて少しサリアの顔が赤くなりましたが、アランは気づいていません。鈍いんですね。

地下4階フロアは通路が複雑に繋がったフロアでした。

一通り、左側を選びながら進んでいると、最初の階段があつた通路に戻りました。

次は左側を選択することになりますが、ここでちょっと一休みです。

お母さんの作ってくれた、平べつたいパンには野菜と高価なハムが挟んであります。

アランが迷宮探索で得たお金で少し購入したみたいですが・・・ふと、アランは前にハムを食べたのは何時だったろうなんて考えてしました。

パンを食べて、水筒のお茶を飲みながら、2人でサリナの作った地図を確認します。

「先ず、じつちから行こうよ。この右側の空白が大きいのが気がなるんだ。」

「此処から始める。どつちみち全てまわるから・・・」

サリナに従つことにしました。左側に進んで最初の分岐を右に曲がります。

しばらく進むと2箇所程直角に曲がつて、その先は行き止りでした。壁に小さな長方形の窪みがあり、木の箱が置いてあります。アランが恐る恐る蓋を開けると、中に小さな薬ビンが入つていました。ラベルが張つてありますが、2人には読めません。とりあえずサリナがカバンに入れときます。

次の分岐は十字路ですから直進します。

何回か道を曲がると、以前田印を付けた分岐に出ました。

そして、問題の分岐路です。

アランは何か胸騒ぎを覚えました。真直ぐな道を進むと、左に曲がり、また右に曲がります。

すると、このフロアで始めての扉を見つけました。

扉の前で聞き耳を立てますが、扉の向うからは何の物音もしません。

扉をそつと開きます。サリナが素早く光球を中に滑り込ませました。

## 水中から出現する通路

サリナが素早く光球を中に滑り込ませ、その後をアランが武器を構えて入ります。

「！」

そこには、頭の2つある蛇が静かにアランを見つめています。サリナも部屋に入ります。やはり蛇の姿に驚いているようです。

驚いて、身動きできぬアランをチラツ見るとサリアが呪文を口にします。

「メル・（待て！）」

サリナは驚きました呪文途中で思念の波が言葉となつて頭の中に入ってきたからです。

（娘よ、驚くにおよばず。私は、遙か彼方より此処に居る者。何ゆえに此処に来たか答へよ。）

サリナは訳を話します。アランが此処を見つけた事。14歳になり一緒に冒険者になつたこと。この迷宮を探索行う事で今までよりましな生活を送れること・・・

（生きる為であれば、それも立派な理由と言える。此処は、この墓所の唯一敵の寄り付かぬ場所故、ここでしばし休むが良い。）

「ここで、少し休めつて言つてゐるわ。」

「でも・・・」

「大丈夫、あれは敵じゃない。」

双頭の蛇の許可を得て、少し此処で休むことにしました。

でも、許可が取れない場合はどうなるのでしょうか・・・  
(お前達については、許可しよう。何時でも来るが良い。他の者

は、その時に驚くとします。(・・・)

サリナは此処までの道を地図に書き込みました。この部屋については使用者を選ぶ休憩所と書き込んでいます。

一休みした所出先に進みます。

また、分岐に戻り、通路を進んでいきますと、下への階段を見つけました。この先は地下5階です。

サリナが地図で分岐箇所を再確認します。といやに、全ての分岐を確認し終えたようです。

「この階はすべて見た。」

卷之二

2人は恐る恐る地下5階に降りていきます。  
今までと違い、やたらに長い階段です。今までなら、2階分位の  
長さです。

やうやく見えた。

「ええ！」「

そこは、広大な水面が広がっています。

立の體を持つのに立場はありません。

広場の周囲は階段のよう、石段が水中に延びています。

高い天井からの僅かな照明で黒い水面が鏡のように反射して、か  
なつ蓮房で見る事が出来るのですが、対岸の壁を見る事は出来ま

せ

ショッパー···つと、サリナが光球を真直ぐに打ち出しましたが、光球はずつと遠くまで飛んで行き、やがて見えなくなりました。

「なんか、とんでもない広さだね。」

「果てがないみたい。」

「ここで、迷宮は終わりなのかな?」と疑問を持ちましたが、ひょつとして何か仕掛けがあるのかもと、広場をくまなく知らべました。

「あれ、この石周りと色が違うぞ!」

「この石も変!」

広場は、石畳です。およそ腕の幅位の正方形の切石が行儀良く敷き詰められているのですが、2箇所だけ、周囲の石と全く違う石が使われていました。

石を叩いてみても変化はありません。表面に文字も・・彫つてありました。

「サリナ!この石、文字が彫つてあるけど・・・

「・・・参・・・」

「どう言う意味?」

「判らない、まいるつて読めるけど・・・」

アランはその文字を押してみました。すると石が少し動きます。乗つてみました。アランが乗ると、石が少し沈むのが判りました。

「サリナ、向こうの石に乗つてみて!」

サリナはとことと走つて行き、さつきの石の乗つてみます。

ガタン!と何かが動きました。

続いて、目の前の水面からザバー・・・と石が水面を割つて飛び出します。

ザバー・・・ザバー・・・

次々と石が水面に浮上します。

そして、静寂が訪れると、そこにはアランの身長程の横幅を持つ、

石の道が水面にあらわれました。

「行くよ！」

アランに続きサリナも水面に現れた道を歩き出しました。石の道と水面はの距離は極僅かです。水面が波立つたら道は水浸しになるような感じの道が真直ぐに続いています。

念のために、光球を頭上高く上げておいて周囲を明るくしておきます。

ザバン・・・

何かが遠くで跳ねたようです。

2人は顔を見合わせると、駆け出します。

ザバン・ザバン・・

水面を跳ねる音が近づいてきます。

2人は走るのを止めて、息を整えます。先ほど、水面が跳ねた時、そこに黒い影があることに気が付いたからです。

決して、見方とは思えません。周りは水面ですが、この狭い道で戦闘は避けられないみたいです。

ザバ！つと前方で音がすると同時に、得体の知れない怪物がアランの前に現れました。

魚と人間を合体させたような怪物です。でも、人魚ではありません。どちらかと言つと・・半魚人。顔は魚で両手両足を持ち、全身に鱗があります。頭髪は無く、頭の天辺から背中に棘のある鱗が続いています。

全身が青白く、蛙のような手足には水掻きも付いてるみたいです。そして、手には短い槍を持っています。

アランは杖の金具を下げる剣を飛び出させます。サリナも杖を構

えます。

ギイイー！つという叫びを上げてアランに飛びかかってきました。体形に似合わず素早い動きです。

アランは鋭い槍の突きを杖の石付でかわします。連係で剣を相手に打ち込みますが、半魚人は素早いバックステップでそれを回避しました。

半魚人の突きをアランが杖を打ちつけてかわし、アランの攻撃を相手がステップでかわす・・・

長く続くと思われた戦いにピリオドを打ったのはサリアでした。

アランの上段斬りをバックステップで避けた所に、サリナの【フイア】が炸裂しました。

ギュアア・・つと、顔を直撃された半魚人が叫びます。そこに、アランが再度上段斬りを肩口に叩きました。シュー・・・と音を立てて怪物が消えていきます。チャリーンっと硬貨が転がりました。銀貨です。

更に道を進むと、アランの身長の3倍程の横幅を持つ広場に出ました。道は見当たりませんし、下に下りる階段もありません。でも、広場の真ん中に大きな壺があります。

「中には何も無いみたいだ。」

アランが杖を壺に入れて確かめています。

「これ！」

サリナが、何かに気がつきました。階段の降口にあつた石板と同じように、石置の石の色が違う場所があります。

アランは前と同じように石板に乗ってみました。確かに同じようになんと沈み込みます。

でも、ここは3箇所です。

どうしたものかと悩みましたが、アランが壺を田にした時、気がつきました。

アランは壺を持ち上げ広場の端に寄つて水を汲むと、その壺を色の変つた石板の上に載せます。

そして、自分も他の石板に乗りました。

「サリナ、そこの石板に乗つてみて。」

「わかった。」

サリナが石板に乗つた途端、田の前の水面からザバー・・・ッと石が水面を割つて飛び出します。

さりに道が続きました。

## 移動用魔方陣

濡れた石の道を2人は歩いていきます。

先ほど歩いてきた道とは右方向に90度變っています。  
そして、また広場に出ました。

広場の石畳に前と同じような色の變った箇所が1つありました。  
アランがその上に乗ると、今度は左側に石の道が水中から顔を出しました。

何回か、行き止まりの広場で色の違う石を踏みながら進んで行く  
と、今までの広場と違い、高さが2段になつている広場に出ました。  
3段の階段を上がって、広場の上段に行きます。すると、今まで  
の倍以上の広さを持つ広場には、身長程の円柱が4本立っています。  
そして、その中には3つの魔方陣がありました。

「移動用魔方陣・・・

それまでジッと魔方陣を観察していたサリナが呟きます。

「何処へ行くの?」

アランの言葉を聞き流すよつにサリナは魔方陣を見比べています。

「これは、戻り・・・これは、進む・・・そしてこれは、帰着・・・

「進むは先に行けるんだよね。戻りつて何処に戻るんだろう・・そ  
れに帰着つて、どこから帰着するの?」

「解らない・・・でも、これだけじゃ魔方陣は作動しないわ。」

「発動させるために、何かいるつてこと?」  
サリナが頷きました。

2人は周囲を探しあげました。どんなものかは解りませんが、

何か有るはずです。

広場の敷石を調べていたアランがふと顔を上げたときです。

4本の柱の内、1本だけ少し模様が違っていました。他の柱に彫刻された小鳥は飛び立つところですが、1本だけは降り立つところなのです。

不思議に思い、その降り立つ小鳥を近くに寄つて見てみると、何かを咥えています。

指で触れると、チャリンと音がして何かがこぼれ落ちました。アランはそれを拾うとサリナを呼びます。

「指輪・・多分これが発動キー」

サリナが指に着けようとするとブカブカです。アランが右手の小指に着けました。

これで、動くはず!と2人で魔方陣の上に乗ります。アランが乗ると魔方陣がパーンと光を放ちながら回転していきます。そして、そこに下に降りる階段が現れました。

「進むは階段なんだ・・」

【進む】とサリアが言つた魔方陣は階段に変わりました。階段から広場に移動しても階段は消えません。

「次は、これにしよう!」

2人は【戻る】と言つた魔方陣に乗りました。

さつきと同じように魔方陣が光り、そして周り始めます。光は段々強くなり、やがて真っ白になりました。

直ぐに光りが弱まり、周りが見えるようになりました。

そして、2人の目に映つた風景は・・・マウント・ワンの入口の広場でした。

「戻つた！・・・

アランが吃驚して声を出しました。

確かに、入口広場です。外に這い出る梯子もあります。

時刻は夕暮れ時のようにです。このまま戻ると闇の中の山道を歩く事になります。

「ここで、野宿するよ。薪を取つてくるから此処にいてね。」

サリナにそう言い聞かせると、梯子を上つて急な斜面で薪を探します。

ある程度薪を集めると、蔓で束ねて背負います。何度も斜面を転げ落ちそうになりましたが無事、薪を集めてサリナの待つ広場に帰る事が出来ました。

広場に戻つてみると、サリナが広場の一角にジッと立っています。アランは急いでサリナのところに行くとサリナの視線の先を見ました。

するとそこには、さつき地下5階で見た魔法陣と同じような模様が広場の敷石に刻まれています。

広場に積もつた枯葉で今まで判らなかつたのですが、サリナが焚き火の準備をするため広場の枯葉を片付けたので出てきたみたいです。

「これは？」

「【進む】」

2人で魔方陣に乗つてみました。

さつきと同じように光りながら魔方陣が回転して、白い光りに包まれます。

光が弱まると、そこは、水に浮んだ広場です。周りに4本の柱が立っています。

下を見ると、サリナが【帰着】と言つていた魔方陣の上に乗つて立っています。

下を見ると、サリナが【帰着】と言つていた魔方陣の上に乗つて立っています。

います。

「どうやら、地下5階の魔方陣を使つと地上階と地下5階を一瞬に行き来できるみたいですね。

2人はもう一度入口広場に戻ると、野宿の準備を始めました。枯葉を退かして敷石の上で焚き火をします。

小さな鍋に、乾燥させた野菜を入れ、干し肉をナイフで刻みながら入れてしばらく煮込むと、美味しいスープの出来上がりです。焼き固めたパンをスープに浸しながら2人でお食事です。

夜は焚き火の火を絶やさないようにしながらマントにくるまってお休みです。

何時の間にか、うとうとと眠つていたようですが、ふと気がつくと辺りは明るくなつていきました。

地下5階には何時でも行けるので、一旦村に戻る事にしました。山道をトコトコと歩き、村に戻ると最初にギルドに行きました。ギルドで手に入れたものを鑑定して貰うのです。

「あら、いらっしゃい。」

ギルドのお姉さんが挨拶してくれます。

鑑定をするドワーフのお爺さんを呼んで貰うと、早速、薬瓶の鑑定をお願いしました。

「ほおー、今時珍しいものじゃ。・・・これは、極上の回復薬だ。どんな状態でも一発で元に戻る。魔法使いは魔法力が元に戻るし、戦士なら瀕死の重傷でも元に戻る。」

「買つて頂けますか?」

「もちろんじゃとも・・・そうじやな・・金貨一枚で如何じや?」

2人は直ぐに承諾しました。始めてみる金貨です。ピカピカに光っています。

「それで、この前頂いた、この武器なんですか？」

「やはり……ダメか。」

「いえ！ そうじゃなくて、少し改良して頂けないかと……」

「うん？ ……何処じゃ？」

「この剣の部分の先端なんですが、片刃ですよね。そこで、此方側にもこの位の範囲に刃をつけて貰えたらと……」

「理由は？」

「槍としても使えたらと……今のままだとどちらかと云つと長めの剣ですが、これだけ長さがあるんですから槍のよつにも使いたいんです。」

「判つた。明日取りに来い！ 金は要らん。」

アランとお爺さんの話をお姉さんは「ヒヒヒしながら聞いてました。

「ほんとに気にいられたみたいね。」

「ヒヒヒヒヒヒ！ しゃい。レベルの確認をしますか？」

2人は、前のようにお姉さんが取り出した水晶球を代わるがわる両手で掴みました。

そして2人から預かつたカードを箱の中に入れます。そして、箱からカードを出すと内容を確認しました。

「ふうん……頑張ってるみたいね。レベルが6まで上がってるわ。これだと……アラン君は簡単な魔法なら3回程度は使えるよ。サリアちゃんは、全体魔法も使うことができると思つわ。レベルから1を引くと迷宮攻略の階数がわかるつて言つたけど……アラン君達はどこまで行つたの？」

「その言葉の通りで、今地下5階です。」

「そなんだ。でも、無理はしないでね！」

お姉さんに別れを告げて2人は自宅に戻りました。  
今日は迷宮探索を止めて1日休息です。

## 長柄とホーク

次の朝、サリナが何時ものよつにアランをむかえに来ました。アラン達は早速ギルドに向います。昨日頼んだ武器を受取らなくては迷宮探索は無理ですからね。

ギルドの扉を開くと、お姉さんが待つてました。  
ドワーフのお爺さんが武器を取り出します。

「これで、良いじやろつ。少し刀身の厚みを増してあるが、そうしなければ刺した時に折れてしまう。開いてみる！」  
アランは杖の上に付いているワッカを外します。

ビュン！ と刀身が飛び出しました。刀身の先だけは両刃の剣のようになっていますが、その他は前と同じです。刀身を厚くしたと言つていきましたがさほど氣になりません。今まで通りに振り回せます。

「どうじや？」

「ありがとうございます。十分です。」

「そうか・・それで、なんだが・・その武器に名前を付けたい。

【長柄】とな。

「解りました。【長柄】ですね。」

2人はギルドを出て行きます。

「よひやく、名を残す機会が得られたわい。」

「お爺さんの夢でしたからね。」

ギルドの2人はそんなことを言しながらアラン達の無事を祈りました。

マウント・ワンの入口広場に着くと早速、【進む】の魔方陣に乗

ります。

2人を光りが包むと、地下5階の水の広場に出ます。  
そこにある、地下6階への階段を恐る恐る降りていきます。

地下6階に下りると直ぐにサリナが光球を2つ頭上に出現させました。

そこは、広い空洞でした。階段を降りたところは石畳の広場がありますが、そこから、岩だらけの風景がひろがっています。その中に、街道のようす道が続いていました。道はアランの身長ほどの横幅がある石を連ねて出来ています。

2人が最初の石に乗ったときです。

石が光つたかと思うと浮き上がり、2人を乗せて石の上を滑つていきます。どうやら魔法で2人を運んでいるようです。

道は一本道で、わき道はありません。

少しの間乗つていると前方に丘のようになつた所があります。どうやらそこに運ばれているようですが・・魔物の姿もそこにはありました。

リューアイは長柄のワッカを降ろして刀身を出します。サリナも杖を構えて何時でも魔法弾を発射できるように構えます。

そこに居たのは、豚の鼻を持つ子鬼のオークです。  
片刃の剣を持ってアランに向つてきました。

【ファイア！】

「オーッと炎の塊が走ると、オークの顔面にぶつかりました。  
あまりの熱さにのけぞつたオークの首筋を狙つて、アランの長柄  
が切り込みます。

グエエ・・・

醜い声をあげながらオークは斃れました。

次のオークも向つてきます。奥に居るオーク達も此方に来ます。  
サリナは破裂弾を取り出してオークの群れに放り投げました。

ボン！つという音と共にオーク達が倒れました。すかさずアランは長柄で首の付根を突き刺します。

さらに向つてくるオークには長柄を振り回して牽制します。

そこをサリナが【ファイア】で攻撃します。

連係を取りながら数匹のオークを無事退治することができました。

サリナがオークの落とした硬貨を拾つていると、鍵が落ちていることに気がつきました。

とりあえず、カバンに入れておきます。

「全て銀貨。」

苦戦しましたが、成果はあつたようです。  
丘の上を調べます。オークがたむろしてゐる位ですから、なにかあるかも知れません。

岩の陰に2つの箱がありました。

片方には綺麗な腕輪が入つています。サリナがきれいといいながらカバンに入れました。

もう片方には鍵がかかっています。

さつきの鍵を取り出すと、ピタリと合います。

鍵を外し、箱の蓋を開けると、丘の一部がゴガガガガ・・・と音を立てて岩を持ち上げました。

どうやら、地下6階への階段のようです。

地下6階へ行く前に少し休息です。

オークは強敵でしたがこのフロアが一番楽にクリア出来ました。でも、次もそうだとは限りませんからね。

休憩を終え、階段を降りていきます。降りたところで、サリナが光球で辺りを照らすと・・・規則正しい通路がそこには並んでいました。

降りた所から横に長い通路があり、そこから縦に6箇所程通路が

あります。通路の横幅は今までと同じようにアーチの身長ぐらじであります。

とりあえず左端から探索開始です。

出来るだけ、左によって縦の通路に向きます。

サリアは【ライト】で光球を追加し、前方に飛びします。ヒューンと飛んで止まりました。この通路は行き止まりのようです。

周囲を観察しながら恐る恐る歩いていきます。

突き当たりまで来ましたが何もありません。横道もありませんでした。

ゆっくり歩きながら横道まで戻ります。そこでサリナが紙にこのフロアの地図を書きます。一つ田の通路を書き、何も無いと書き込んでいます。

次の通路です。同じように【ライト】を使用します。さつきより短い距離で光球が止まりました。

やはり行き止まりのようです。進んでいくと行き止まりではなく右に曲がる通路になっています。でも、その先はT字路になっていました。

横に進んだ距離を考えると次の通路に繋がっているようです。床に印をつけて、元の道を辿りました。

縦に並んだ3つ目の道を進んでいます。途中に左へ曲がる道がありました。印がついてます。やはりさつきの道と繋がっています。更に進むと左へ通路が続いてました。その先は行き止まりですが、壁にレバーが付いてます。

アランは散々悩んだ末にレバーを下ろしました。その隙にサリナは地図を描いてます。

元の横道まで戻り、次の道を進みます。

今度は途中に横への道がありました。印をつけて更にすすみます。するとさつきとは逆の方向に道が続き同じようにレバーが壁に付い

てます。

アランは迷わずレバーを降ろしました。

すると、どこかで、バタン！と扉が開く音がしました。

元にもどりて、次の通路を進みます。やはり予想通り途中で左に折れさつきに印のところに出ました。急いで戻ると最後の通路に入ります。

通路は真直ぐに続いていました。今までよりも遠くまで光球が飛んでいました。

通路の先は左に折れて続いています。

2人は周囲をよく見ながら進んでいくと、丁字路に出ました。印を付けると先に進みます。すると、通路は左に折れ更に続きます。

そして、最初の横道に出ました。

サリナが地図を確かめています。ビラやいら、2つのレバーを操作しましたで、新たな道が出来たみたいです。

とすると、更に先へ進むにはさつきの丁字路を進むことになります。

2人は急いでさつきの場所へ戻りました。

印のついた丁字路に戻ると左に折れて進みます。

サリナの作った光球もずっと遠くで止まっています。

途中に扉がありました。

中からずりづりとなにかを引きずる音がします。

アランとサリナは顔を見合せました。サリナはカバンの中から何やら取り出します。

アランがそうと扉を開くと、その隙間からサリナが小瓶を中に投げ入れます。急いで扉を閉めると同時にバン！という大きな音と共に強い光りがドアの隙間から漏れました。

武器を構えてそうと扉を開き中を覗きます。

そこには下半身が蛇になつた女性が目を回していました。

敵かどうかわかりません。とつあえず武器を構えて氣がつくのを待つことにしてました。

「ふえ・・・酷い目にあつた・・・あんた達ね！今度したらただじやすまないから・・・つて武器さげてくれない？」

2人が武器を今にも使いそつになつてゐることに氣がつき、途中からお願ひモードになつてます。

「誰？」

「誰つて・・・ミーアよ。此処にずっと住んでるんだけど・・・入口を見つけたみたいね。それじゃ、此処ともお別れかな・・・煩くなるし、やたらと挑んでくるし・・・」

「行く当では有るの？」

「無いけど・・・その内また見つけるわ。ちよつと待つてね。」  
ミーアと名乗つた怪物は光りに包まれると普通の女性に姿を変えました。

「これで、外に出れるわね。持ち物は・・・これぐらいかな。後はあなた達にあげるわ。」

そう言つて部屋を出て行きました。

呆気に取られて見てましたが、もう彼女は居ません。  
部屋の中は小さな水溜りと蠅燭台があるだけです。

「これ！」

サリナが部屋の隅に小さな小箱を見つけました。

蓋を開くと、指輪のようです。サリナはバックに入れました。

部屋を出て先に進みます。

直ぐに下に降りる階段を見つけました。

サリナが地下6階の地図を書き込みます。さつきの部屋には・・・  
もつ誰も居ない・・・と書いてました。

## 地下の砂地に潜むもの

地下7階に2人は降りていきます。

フロアに到着すると同時に、サリナは【ライト】を唱え、光球を頭上と前方に飛ばしました。

辺りが、サーっと明るくなります。

今度のフロアは地下3階と同じように大きな部屋でした。床が砂地である事が少し違います。

柱もあるんですが・・・傾いていたり、上部が破損したりしています。

よく見ると、何箇所か大きな岩が顔を出しています。床よりサリナの身長位高いでしょうか・・・岩に登ればこの部屋の全体が見渡せるかも知れません。

アランが近くの岩に歩き出た所とした時です。

「！・・・

サリナがアランの服を掴んで引き止めました。

「下がって・・・【ファイア！】」

アランの足元に火炎弾を放ちます。

ジョア！つて、何かが焦げる音がするとともに嫌な匂いがたちこめました。

よく見ると、体長が片腕程の大きなサソリです。

砂漠みたいに見えることから、住み着いているのかも知れません。

更に1匹のサソリが近づいてきました。

アランは長柄の先でブス！つと突き刺します。

サソリをよく見ると目がありません。・・どうやつて、自分達を

見つけるのでしょうか？

「ひょっとしたら・・・」

アランは足元の小石を拾うと遠くに放り投げます。砂地にトン！と小石が落ちた廻りの砂の中から、サソリが這い出します。

「音に反応するんだ。もしかしたら、砂に伝わる振動かも知れないけど・・・」

アランは階段近くの小石を沢山拾いました。サリナにも少し持たせます。

「あの岩から離れた所にメルトを撃つてくれない？そしたら、そこにサソリがあつまるから、あの岩まで安心して行けると思つんだ。」

「サリナは杖をかざし、【メルト！】と叫びます。

火炎弾がスーっと勢いよく離れ、アランが指差した所に着弾すると、ドン！と炸裂します。

たちまち、付近のサソリが着弾地点にワサワサと集まりだしました。

た。

「行くよ。足音を立てない様にね。」

2人はそろりそろりと岩に向います。途中、2人に向つてくるサソリもいましたが、アランが長柄で突き刺し、遠くに投げていきます。

ようやく、岩に辿りついた時です。「ゴゴオオー！」という音がサソリが密集している付近で聞こえたかと思つと、巨大な顎が砂の中から出現しました。

サソリを纏めて座ると、"ドドオ・・と砂の中に潜つて消えてしましました。

「砂虫・・・」

「砂虫つて、土の中に住んでて、牛でも襲つてこうあれか?」

サリナが頷きました。

ちょっとヤバイのがいるよつです。

岩に辿りつくと、岩の構造が少し変わっています。砂から腕の長さくらいには垂直に磨き上げられていきました。

マイショつて岩に登ると、ちょっとした家くらいの大きさです。真ん中が高くなっているのでそこまで上り、部屋の状況を見渡します。

サリナが光球を追加します。

すると、この部屋の右奥の彼方に小さな広場と階段らしきものが見えました。

さらに、部屋の奥には広場までの小さな小道が有る事が分かりました。横幅が片腕程の小道ですが、砂地からの距離が有るので安全に通れそうです。

しかし、その小道までが問題です。

小道は途中にある岩に登れば通ることが出来そうですが、そこには至る砂地には、右手には、砂鮫の背びれが見えますし、左手には砂が大きく陥没しています。陥没した底では大きな顎がワキワキと音を立てています。

鮫のいる砂地はとても細かい砂のはずです。踏み入れたら、ズブズブと沈む事確定です。

鮫と蟻地獄の境界を縫つて進むしか方法は無いよつです。

アランの服がチヨンチヨンと引かれました。サリナが何か見つけたようです。

サリナの指先には岩と同じ様な色をした箱がありました。そつと蓋を開けると、板が何枚か入っています。板の真ん中には穴が2箇所開いていました。

「そうか！これで渡るんだ。」

アランはサリナに使い方を説明します。紐は箱の底に沢山入つてました。

2人は靴底に板を紐で括り付け、蟻地獄の窪地の廻りを少しづつ慎重に進みました。途中でサソリが這い出していましたが、小石を蟻地獄の窪地に投げると、そちらに向ついてきました。

サソリは途中で聞き返そうとしましたが、砂が崩れて落ちていく一方です。最後には、底で待っている顎がサソリを砂の中に運んでいました。

何匹かのサソリを蟻地獄や砂鮫の方角に小石を投げて誘導して、よつやく小道に繋がる岩に辿りつきました。

狭い小道を2人はゆっくりと進みます。落ちたら、サソリと一緒に運命ですから、慎重にもなりますね。

小道を進み、小さな広場に着くと、地下に続く階段がありました。2人はサッサと階段を降りていきました。

地下8階は、村の道幅位の真直ぐな道でした。

サリナの放った光球が真直ぐ進んで階段らしき欄干を照らします。でも、途中に横道があるようです。

アランは長柄のワッカを下ろして、片手剣を出しました。サリナ

もいつでも火炎弾を発射出来そうです。

慎重に進んで最初の十字路に差し掛かります。

「ワア！」と叫んでアランが左の横道に飛び込みます。もし、右から敵が現れたら、サリナが火炎弾で応戦する作戦です。しかし、何の音もしません。

「こつちは行き止まりだ！」

アランはそのまま戻ると右の横道に入ります。

「箱を見つけた！」

箱を開けると、銀貨が5枚入つてました。直ぐにサリナの所へ戻ります。

最後の十字路に来た時です。右側から微かにカシャカシャ・・と言つ音が聞こえます。

サリナは爆光球を取り出しました。

そつと右の通路に転がします。

ボオオン！つと音と光りが溢れました。

右手に入るとサソリの外皮で作つた鎧を着たトカゲ戦士が倒れています。

アランはすかさず、長柄を戦士の首に突き刺しました。チャリン

つという音とともに戦士の姿が消えて行きます。

奥に箱があります。開けると中には綺麗な象嵌を施したナイフが入つていました。

サリナがバックに收めます。

左手は行き止りで何もありません。

そして、地下9階に向います。

地下9階は球形の部屋の集合体でした。

1つ1つが丸い部屋です。そして、他の丸い部屋に繋がっています。

構造自体は最初の頃の部屋に似ていますが、光球を2個上げて置くと、部屋が白いせいでしょうか、眩しく感じられます。

そんな中にも、怪物はいます。

オーラと出会い・トカゲ戦士と出会い・

今は、デッカイ鶏と戦っています。

鶏の動きは素早く、魔法も、アランの攻撃も中々当たりません。鶏はくちばしと足の逆爪で攻撃してきます。

アランは大きな傷を受ける事はありませんでしたが、体中に無数の傷を受けています。

「ヒュイー！」

気合とともに振り払った長柄の刃が鶏の足を傷つけたようです。みるみる動きが鈍くなつた所にサリナの【ファイア】が辺り炎が鶏を包みました。

「ヤアアー！」

繰り出した長柄に体を突き刺された鶏は硬貨を残すと消えて行きました。

フーフと息を吐くアランに治療魔法、【ヒール】を放つて怪我を治します。

でも、ボロボロの服はどひょひょも有りませんでした。

## サリナと一緒に

デッカイ鶏と戦つてどうにか勝利は収めましたが、アランの服はあちこち破れます。

結構丈夫な生地なんだけどなあ・・・ってアランは思つてますけど、魔物の攻撃力は侮れません。

球形の迷路を制覇して地下10階へ下る階段の脇に見たことのある魔法陣を見つけました。

迷宮入口へ戻る事の出来る【移動用魔法陣】です。

「戻る!」

サリナが魔方陣に入ります。アランが魔方陣に入ると光が2人を包み込み、あつと言う間に迷宮入口の広場の魔方陣に移動する事が出来ました。

2人はマル1日迷宮にいたようです。

入口に戻ると、太陽は真上を過ぎた辺り・・・昼過ぎですね。

村に戻ると、早速アランの装備を変更します。

アランの住む村は山間の小さな村です。村人も300人位でしかいません。

そんな村ですがお店は一つあります。

俗に言う雑貨屋さんです。食料品から武器、防具まで何でも揃つてます。でも、良いものはありませんけど・・・

「こりにちは!」

アラン達が店に入ると、店員のおじさんが出できました。

「おお・・・アランじゃないか!・・・だいぶやられたようだな。」

「テッカイ鶏と戦つて・・何か動きやすくて、軽い鎧はありますか？」

「待つてな・・」

おじさんはそつと奥に入つて行き、しばらくすると、皮の鎧を持つてきました。

「この店だと、軽い鎧はこれになつちまうな。後は、鉄の鎧だから重くて動きは制限されちまう。丈夫さは十分なんだけどなあ・・」

「旅人が使うこの丈夫な服は、肘や膝等に皮を張つてある。この上に皮の鎧を着るんだ。奥で着替えてみる!」

アランは奥に行つて着替えてみました。

以前着ていた服と同じような旅人用の服は、肩や肘等が2重の布になつています。その上、擦り切れそうな部分には鹿皮で補強されています。

皮の鎧は、丈夫な牛の皮が2重、3重に重ねて作られており、動きやすさによつて肩や、胴の部分は別のパーツを革紐でしっかりと繋がれています。

店に出ると、ほつ・つておじさんに感心されました。良く似合っているみたいです。

サリナもアランを見て少し顔が赤らんでます。

「ところで・・値段は?」

「そうだな・・銀貨20は欲しいところだが、18で良いで。」

防具の購入は初めてなので少しあまけしてくれるみたいですね。早速、サリナが支払つて、ギルドに向かいました。

ギルドの扉を開けると、お姉さんに鑑定の依頼を頼みます。

お姉さんに呼ばれて奥の事務所から、ドワーフのお爺さんが出でます。

サリナはカバンから、指輪を取り出しあるお爺さんに渡しました。

アランも指輪を外すとお爺さんに渡します。

お爺さんはしばらく指輪を見てましたが、台座に刻まれた文字を見つけると、奥に入つていきました。

しばらくして戻つて来ると、「コツイ手の平に指輪を乗せてアランに鑑定結果を話します。

「・・・これも珍しいものじゃ。この指輪は転移と方向の2つの性質を持つてある。多分造った者は、そこまでしかこの指輪に機能を付加することが出来なかつたのじゃろう・・。明日取りに来い。この指輪を合体してやるつ。」

アラン達は、お願いしますと言つて帰つて行きました。

「しかし・・中途半端な仕事をする奴もいるのぉ・・なぜ、合体させなかつたのじゃろう・・」

「あえて、合体させなかつたのでは?・・・2人そろわなければ入れないとか・・」

「そうじやのう・・そう考えれば納得も行くが・・そつすると、あの迷宮は何かを祭つた物かも知れんな。」

「では・・それほど深く無いと?」

「そうじや。もし、何かを祭つた建築物だとすれば、深くて地下20階、通常なら地下10階程度じやろう。・・・誰にも邪魔をされずに最終階まで到達出来るじやろう。」

お姉さんと、お爺さんは2人が出て行つた、扉を見ながらしばらく話続けていました。

今日は、此処までとこつことで、2人は道を分かれて家に帰りました。

まだ面倒がだといひのに早々とアランが帰ってきたのでお母さんは少し驚きましたが、冒険者にはある程度の見切りが必要です。もう無理ーと思つたら、直ぐに引き返す。これが出来る冒険者が本当の冒険者だとお母さんは考えてましたから、こんなに早く帰つてきた事情についてはとやかく言つことをやめました。

「お母さん。こまゝお茶を入れてあげます。

」の所、アランの冒険者としての働きは順調です。それなりの収入を得てますから、もう、お母さんが無理をして働く事もありません。病気がちのお母さんの体調も以前よりずっと良くなりました。

「今日は地下9階まで行つてきたんだ。でも、デッカイ鶏に合つて、服がぼろぼろ・・そんな訳で、お店で鎧を買つたの！」

アランはお母さんが聞きたかったことを話しました。

「アラン・・無理はしないでね。サリナも一緒なんだから・・時には逃げるのも勇氣なのよ。」

お母さんは、まだ地下2・3階で戦つてるとばかり思つていたようです。深い地下にはその深さに応じた魔物がいます。ゆっくり確実に進むことが大事なんだとアランに諭します。

アランの家の扉をトントンと叩く音がしました。

お母さんが扉を開けるとサリナが立つていました。

お母さんは、サリナを招き入れると、アランの隣に座らせてお茶をじじ馳走します。

「どうしたの？」

アランは、聞いてみました。さつき、また明日。つて別れたばかりだからです。

「お婆ちゃんが・・行っちゃつて・・

サリナのその言葉でお母さんは此処に来た訳がわかりました。

魔法使いの老後は神殿で迎えます。

神殿は治療ばかりではなく、剣や鎧等に付加魔法を付ける場所でもあります。治療魔法は神官がこなしますが、付加魔法は神官では出来ません。

神殿は、年老いた魔法使いの老後の世話をする代償として付加魔法を魔法使いに行つてもらうのです。

サリナのお婆ちゃんはある程度の腕を持つ魔法使いです。付加魔法も低レベルであれば十分こなせますから神殿で老後を迎えることは悪いことではないかも知れません。

でも・・・そうすると、残されたサリナはどうするのでしょうか・

「サリナ・・ひょっとして、お婆ちゃんが此処に来るみたいに言つたのかしら？」

サリナは小さく頷きました。

私に託したといふことかしら？？？でも、いくら冒険者でもまだまだ子供が一人で暮らすのは大変だし、この村にサリナを他に託せるような家も・・確かに無いわね。アランのお嫁さん・・少し早いかも知れないけど、何時かは貰うのだし・・知つての娘なら安心だわ。

「アラン・・サリナと暮らしたい？」

「冒険も一緒にだし……もう一緒に暮らしていいような気がするナビ。

「じゃあ、問題ないわね。……サリナ。今日から此処で暮らしなさい。……お婆ちゃんには、確かに預かりましたと連絡してくれない？それとアランで暮らす準備があれば用意してきなさい。」

サリナはやがて回り歩きながら顎にて、アランの家を出て行きました。

「お母さん……サリナも此処で暮らすの？」

「やつよ。やつよ貴方も一緒に暮らしてみつだ。と話してたじやない。貴方の未来のお嫁さんと思えば今から暮らすのも問題ないわ。」

せう話つてお母さんせじにかに出てかけていきました。

そんな……ってアランは思つてしまたけど、悪い気はしません。サリナは無口ですが、よく気がつく娘です。でも、この家には部屋がひとつしかありません。サリナは何処で寝るのでしょう……。そんな心配をしてると、出かけていたお母さんが帰つてきました。

「すみません……ここから入れてくださいな。」

扉を開けると、外に向つて言いました。

すると、雑貨屋さんのおじさんとお兄さんがベッドを運んできました。

よつよつよつて家にベッドを運び入れ、お母さんの指示に従つてアランのベッドの隣に据えつけます。

雑貨屋さんが帰るとアランの前にお母さんが座りました。

「今日から、サリナと一緒によ。娘ができたみたいでお母さんは嬉しいわ。・・大きくなつて、アランのお嫁さんになつてくれればもつと嬉しいいんだけど・・」

「まだ、14だよ・・・でも一緒に暮らせるのは嬉しいな。」

そんな話をすると、扉を叩く音がします。

お母さんが扉を開けると、籠を背負つて包みを両手に持つサリナが立つていました。

「お婆ちゃんが・・これを・・」

サリナが手紙と包みをお母さんに渡します。

後で読む事にして包みを開けると・・・花嫁衣裳です・・・きっと、サリナのお母さんが着た物なのでしょう・・・何時か、孫に着せてあげたいと、どんなに貧しくとも、手放さないできたようです。

籠ともう一つの包みはサリナの小物と普段着が入つていました。ぼろぼろ状態のものもありましたが、大切に使つてきたのじょ、汚れは全くありません。

「此処が、貴方とアランの部屋よ。小さいけど・・・仲良く暮らしなさい。」

お母さんはまた、家を出て行きました。

今度は、サリナの普段着を買つてきたようです。それと、丈夫な旅人用の服も買つてきました。だつて、最初にあげた服をまだ着ていたからです。

女の子の買い物も楽しいわね・・・お母さんはそつ思つとじゅつと嬉しくなりました。



次の日の朝早くアラン達はギルドに向いました。

アランは真新しい皮の鎧の後腰に片手剣を付け、肩から小さな力バンを下げる、長柄を持つてます。

サリナは、新しい黄色のシャツに旅人が着る厚手の上下服を着て、お母さんに貰ったマントを羽織っています。肩から下げるバッタはアランとお揃いです。そして、おばあさんの形見の魔法の杖を持つてます。

靴は、皮のブーツですが、滑りにくいように厚い裏側には何本かの溝を刻んでいました。

ギルドの扉を開けると、カウンターのお姉さんに挨拶して、ギルドカードの更新をします。

お姉さんは、2人のギルドカードを受取ると、カウンターの下から水晶球を取り出し、2人に代わる代わる水晶球を持たせました。

「ううん・・少しレベルの上昇が早いよつな気もするわね・・無理しないでね。」

2人はお姉さんからカードを受取ると、レベルの確認をします。レベルは12になつていきました。レベルの確認と同時に内から力が沸いてきます。どうやら、水晶球を持つ事で、レベルにあつた力が付加されるようです。

「ちよつと待つてね。呼んでくるからー。」

お姉さんが事務所から、ドワーフのお爺さんを連れて来ました。

「おお・・出来取るぞー・・・」れだ。・・・移動用魔方陣の中で、この指輪を付けて念じれば好きな所に運んでもらえる筈じや。」

アランは有難く受取ると、ギルドを出てマウント・ワンを田指して歩き出しました。

山道を歩き、斜面を降りて、入口前の広場に出ます。

そして、移動用魔方陣に2人で乗ると、頭の中で地下9階と念じました。

たちまち、魔方陣が発光して2人を包みます。

光が薄れて、2人が目にしたのは地下10階に下りるための階段でした。

地下迷宮の薄暗い闇は、サリナの光球でたちまち明るく照らし出されます。

アランも、長柄のリングをずらして長柄の刃を伸ばしました。

そろりそろりと階段を降りていきます。

地下10階の踊り場に降り立ち、サリナはさらに2つの光球を天井に上げます。

部屋の全体がぱーっと広がりました。

その部屋は以前の水の部屋と少し似ています。

ただ、道の両側は身長程低くなつており、底には一面に掌の長さ程の棘が生えています。棘の海みたいですね。

道の先には、アラン達が今いる踊り場程の大きさの広場になつていますが、中心部が高くなつてるので先がどうなつているか判りません。

しかも、その広場には大きな狼みたいな怪物がいます。普通の大きさの3倍近くあります。

今いるところからは3つの広場が見えるだけですが、各広場に3匹以上いるみたいです。

「サリナ。・・魔法で攻撃できない?」

「ぐんと頷ぐと【メルダム!】と唱えます。ビューン・・と火炎弾がサリナの持つ杖から打出され・・前方の広場にドドーン!と着弾すると盛大な炎が広場を覆います。火炎が収まるとき、広場に動く気配はありません。

でも、その音に反応して、他の広場から狼が移動してきます。

「凄い、威力だね。・・後何回出来るの?」

「レベルが上ったから・・後5回・・」

この先も、ありますからあまりサリナに無理をさせるわけにもいきません。

移動してきた狼が前方の広場に集まるのをひたすら待つことにしました。

アランは2人が並んで通れる位の道を前にして長柄を構えます。何時、狼が道を走りこんで襲つてくるか判りませんからね。

サリナは踊り場を移動しながら部屋の全体像を調べようとしてますが、あまりつかめません。やはり目の前の前の広場まで行く必要があるようです。

しばらくすると、前方の広場に数匹の狼が集まってきたようです。しきりに此方を伺っていますが、道を走りこんでくるものはいないようです。

「サリナ。・・もう一度、お願ひ!」

「Jくんと頷くと、再び【メルダム！】と唱えます。

ビューン・・と火炎弾がサリナの持つ杖から打出され・・前方の広場にドドーン・と着弾すると盛大な炎が広場を覆います。

「行くよ！」

アラン達は棘の海に橋のようにせり出した道を歩いて、前方の広場に歩き出しました。広場は棘の海に浮ぶ島に見えなくもありません。

黒こげの狼の体からはまだブスブスと煙が出ています。アランは広場に着くと同時に狼に止めを刺して行きます。

「えい！」 つと繰り出す長柄に突き刺された狼はチャリンという軽い音を立てて煙のように消えていきます。

8匹に止めを刺したアランは広場の真ん中まで上ります。そこは、アランの身長程の高さがあります。

銀貨を回収したサリナも上ります。

そこから見渡す部屋の様相は、・・・壙の無い迷路みたいです。数箇所ある広場の山の部分で微妙に道が隠されています。

今いる広場からも、左右に道が続いています。

「どうやつ、全部を回る必要があるみたいだね。」

「そうね・・・」

サリナはそう言つと、左側の道に向つて歩き出します。

アランは慌てて後を追いました。左側の道の先にも広場があります。最初の魔法攻撃の後で此方に狼が走ってきたのを見ましたが、まだ残つていないとの保障はありませんからね。

アランはサリナの前に出ると、サリナに言いました。

「先行は僕！・・・サリナは接近戦が出来ないんだから・・・僕の後にいることーー」

「・・・判つた・・・」

どうやら、サリナはこの先の広場には狼がないと判断して、先に向つたようです。でも、用心に越した事はありません。そんな事まで心配してくれるアランに少し嬉しくなったみたいです。

今度の広場には、やはり狼はいませんでした。

広場の中央に立つと、奥に向つて真直ぐに1つの道がありました。道の終端に何があるみたいですね。

早速、2人はそれに向つて道を進みます。

「なんだ、これ？」

そこにあつたものは、レバーでした。

何かの仕掛けだと判断したアランはレバーを手前に引いてみます。ガコン・・どこかで確かに、このレバーに連動したような音がしました。

最初の広場まで戻ると、サリナはカバンから薄い皮をとりだして、地図を作成します。階段と広場そしてせり出した道と仕掛け・・廻りを囲む棘の海・・

今度は、右の道です。先にある広場には動くものはありません。アランが先頭をゆつくりと歩いていきます。先にある広場には2つの道があるようですが、その道を渡つてくる狼はありません。

広場まで後一步の所で、一旦立止まり、後のサリナに頷くと、一気に広場の中央に躍り上がります。

素早く周囲を確認し、何もいないことを確認して、サリナに手を振りました。

広場には何もありません。やつてきた道に對して左方向に道が一本あります。

先に見える広場には・・狼が此方を睨んでます。

でも、姿を見せてるのは1匹です。あまり、サリナの魔力を消費したくありません。

アランは、長柄を構えてゆっくりと道を進んでいきます。その後には少し離れてサリナが続きます。

長柄の真ん中を肩幅程に両手を離し斜めに構えます。

こうすれば、長柄の先で切る事も、柄の石突で殴りつけることも可能だからです。

突然、狼がアラン目掛けて走り出しました。

飛びかかってくる狼目掛けてアランは長柄の石突で横薙ぎに払います・・狼は体勢を崩され・・道の下の棘に全身を串刺しにされます。チャリン・・と音がして消えていきましたが、銀貨を回収する事は出来ません。

広場までもう少しといつ所で、一旦立止まりました。

サリナが【メルト】を唱えました。

小さな火炎弾が広場の裏側に着弾して一瞬火が燃え上がります。でも、何事も起こりません。

アランが一気に広場に移ると、素早く周囲を確認します。そして異常がない事を確認してサリナに手を振りました。

この広場には2つの道があります。

1つは先端に何かあるようですが、よく見えません。もう1つの道は別の広場に続いていますが、そこには狼がウジヤウジヤしています。

とりあえず、道の先端にあるものを確認しに行きます。足早に進み、たまにもう1つの道に狼が進んでいないことを確認します。

先端部にあつたものは、先ほどと同じようなレバーでした。アランが手前に引くと、ガコン・・と遠くでおどがしました。

急いで先ほどどの広場に戻ります。

地下10階の棘の海に浮ぶアイランド・・・広場はそんな感じです。  
横幅は2人が並んで通れるほどの橋のような道は広場を結んでいます。

アランは2つ田のレバーを倒すと元の広場に戻つて来ました。  
次の道を進むことになりますが、その先の広場には狼が沢山いるみたいで

「サリナ・・出来る?  
「分かった・・【メルダム!】」

広場の真ん中に盛大な火柱が立ちました。  
アランは長柄を構えて広場に走ります。  
まだ、息のある狼に長柄を突き刺して止めを差していきます。  
チャリン・チャリン・・銀貨の転がり落ちる音とともに狼は次々と姿を消して行きました。

広場からは壁の奥に向つて1本の道が続いています。  
そこには丸い穴が開いているようです。  
アラン達は壁の穴に向つて進んでいきました。

壁の穴の中には、下に向う階段がありました。  
穴の直径はアランの身長より少し高い程度で、階段の横幅は1人分しかありません。

天井が低いので、サリナは光球を1個階段下に先行させました。  
その後をアランが下りて行きます。

最後に棘の海に浮んだ広場を振り返り、異常がない事を確認した  
サリナが下りていきました。

呆然と立ち尽すアランの見据える先をサリナは不思議そうに見  
つめました。

地下11階に広がる世界・・なぜか村があります。

アラン達の村より立派な石造りの村です。十数軒の家々が何故か  
迷宮の地下11階にあるのです。

2人は用心深く、村の中央の通りを歩いていきます。

サリナは光球を更に2個上空に上げて周囲を明るく照らし出しま  
した。

すると・・

今まで、人っ子一人・・鼠一匹居なかつた村に・・何かの気配が  
感じられます。

気配は段々と大きく・・そこかしこから感じられます。

突然、左の家の扉が開き、子供の笑い声と共に何かが飛び出して  
きました。

キャッキャ・・と笑いながら2人の子供が通りを・・アランの前  
を走り抜けます。

・・でも・・子供の姿は輪郭だけ・・体を通して向こう側が見え  
ました。

「幻影魔法・・」

「これが?・・だって、家は、・・ほら、触れるんだよー・・」

「家は本物・・暮してるのは幻・・」

「村を照らした光球で、発動したのかも・・」

地下11階に幻影の村を作る目的は解りませんが、アランは何か物悲しい気分になりました。

そんな思いを吹つ切るようにアランは道を急ぎます。  
そんなに歩く事も無く、下へ降りる階段を見つけることができました。

サリナが地下11階の地図を書いてます。

（一本道・・村はあるが誰もいない・・）

今度の階段は2人並んで下りる事が出来ます。天井も高いので光球をそのまま階段に移動させました。  
光球が階段の中に入ると、途端に村から人の気配が消えていきます。

やはり、光りに反応して幻影魔法が発動するようです。

地下12階の踊り場に立ちました。

1本の道が天井の高い洞窟の中に続いています。  
至るところで道が分岐していますが、分岐を一つ一つ確認しながら地図を作つていきます。

たまに、魔物と鉢合せとなつたりしますが、殆どが一匹での單体遭遇ですから、レベルの上つたアラン達の敵ではありません。  
サリナのバックにはだいぶ銀貨が貯まつてきました。

途中の部屋では、幅の広い腕輪を見つけることができました。

散々と道の分岐を行つたり来たりしながら、ようやく地下へ下りる階段と、移動魔方陣を見つけることができました。

「サリナ・・一田戻ろう！」

サリナは「クンと頷くと移動魔方陣の上に歩いていきます。アランも急いで魔方陣の上に乗ると、地上の広場を念じました。

魔方陣からの光りが2人を回りながら包みます。

そして、光が薄らいだと思つと・・そこは、マウンテン・ワンの入口広場の魔方陣でした。

太陽は東の空です。

昼にはまだ早い時間ですが、此処で朝食兼昼食を取る事にします。焚き火に小さなお鍋を掛けて水筒の水でお湯を沸かして、お茶を作ります。

残ったお鍋に乾燥した肉と野菜を入れて簡単で、具沢山のスープが出来上がりです。

お腹が一杯になった所で山を降りて村に帰りました。  
先ずはギルドに向います。

扉を開けると何時ものお姉さんにお爺さんを呼んで貰います。

「どうした、なにか見つけたのか？」

「いれなんですけど・・」

サリナがカバンから、幅の広い腕輪を取り出してお爺さんに渡しました。

受取ったお爺さんはしげしげと眺めていましたが、幾何学模様だと思つていた模様が古代文字である事に気がつきました。

「少し、預かって調べようと思つが・・どうじやろうか？」

「構いません。・・どの位、かかりますか？」

「古い文字じゃからのお・・2日程度は必要じゃて・・  
「分かりました。2日後にまた来ます。」

アラン達はギルドを後にして、雑貨屋さんに行きます。  
雑貨屋さんでは、携帯食料と筆記用具を購入します。  
この辺で、マウンント・ワンの地図を一旦清書しておいたりと思った  
からです。

家に着くと、お母さんにただいまをした後は、お風呂を沸かして、  
美味しい夕食を食べた後にお風呂に入つてお休みです。  
もちろん、お風呂は別々に入つてますよ。

## スライムの海

今日は、調査をお休みします。

サリナのマウント・ワン地図作成が意外と時間が掛かるみたいだからです。

今までの、板や布の切れ端等に書いた地図を綺麗な紙に書き[写]します。

フロア毎に書いては、注意点や主な魔物の種類、そして、階段を開くための仕掛けの操作方法等・・余白がどんどん埋まってしまいます。

でも、この地図を作るまでは、マウント・ワンにアラン達以外は入ることが出来ません。

早く作って、更なる奥に進んでみたいものです。

サリナがテーブルで地図を書いているのを横で見ていたアランでしたが、ちょっと気付いたことをサリナに聞いてみることにしました。

「・・そういうえば、前にサリナが部屋の中に何か投げて、ドカン！ってやつたことがあるよね。あれって、僕でも使えるの？」

「爆光球・・使えるわ。・・あれは私が作った。後・・3個ある。雑貨屋でも買える。威力はそっちが上。」

どうやら、手作り品みたいですね。でも、購入品はある程度の攻撃力もあるみたいです。

雑貨屋で買えると聞いて、アランは早速買い出しに出かけます。

「ドカーン！って爆発する球が欲しいいんだけど・・

「何だ・・アランじゃねえか・・爆光球だな？」

「そんな名前だった・・・」

「爆光球は3種類ある。威力は無いが爆発した音で周囲が目を回す、レベル1の黒球。爆発して周囲の敵を負傷させる、レベル2の赤球、噛付き蛇程度は倒せるぞ。そして、メルトより少し威力のあるレベル3の白球だ。」

「値段は、黒が銅貨10枚、赤が15で白が20だ。」

結構な値段ですが、地下10階以降の魔物を倒すと出でてくるのは銀貨ですから、ここは思い切って買うことにしました。

サリナの負担を減らせる事も魅力です。

「赤と白を5個づつ下さい!」

銀貨2枚を支払います。

「ほいよ!」

おじさんは皮の袋に爆光球を入れた袋をアランに渡し、銅貨を25枚のおつりを渡します。そして黒色の爆光球を2個おまけに渡しました。

「球についてる紐を引いて投げるんだ。1・2・3・4で爆発する。いいか! 4でドカンだぞ。」

おじさんに礼を言つて、雑貨屋を出ます。

家に帰りかけましたが・・ギルドにいく事にしました。

そういえば・・鑑定を依頼してたんですね。

「ほんにちは!」

ギルドの扉を開けると、カウンターのお姉さん「」挨拶です。  
お姉さんは、（ちよつと待つててね）つてドワーフのお爺さんを呼んでもました。

「おお・・・来たか。・・・例の腕輪だな。・・・」  
【アクセル】を付加する魔道具らしい。

「アクセルとは身体速度の上昇魔法だ。魔法のアクセルまではいかなくとも、3割程度身体速度を上げることが可能じゃ。・・・しかもその状態でさうに魔法のアクセルを付加することができる。」

「ありがとうございます。・・・鑑定料は・・・」

「前にも言つたはずじゃ。いらん！・・・もつと珍しい物を持っていい。それが、鑑定料だ。」

アランがギルドの扉の所でもつ一度お爺さん達に頭を下げるとい外出で行きました。

お爺さんとお姉さんはしばらく扉を見ていました。

「今、どれ位にいるんじゃ・・・」

「地下12階だそうです。」

「・・・さつきの腕輪じゃが、王宮の近衛隊長が持つているもので、2割増しじゃ・・・3割等始めて見るわい。・・・それ程深くはないと思つが楽しみじゃな・・・」

「貰つて來た！」

家につくなり、サリナに報告です。

サリナが手書きしている地図の上に赤球と白球、それに黒球をこねこねと転がします。

「爆光球！・・・何故？」

「この前みたいに敵が隠れてたり、まとめて倒すのに使う。サリナの魔法の威力は凄いけど・・・連発したら持たないよ。」

「魔力回復薬・・・持ってる！」

「それでも、不足することがあると思う。今地下1・2階まで行つたけど・・・結構大変だった。」

「解つた。」

「それと、この腕輪なんだけど・・・アクセルが付加されている。僕が使ってもいいかな？」

「いい。アクセルは戦士系へ使う・・・問題ない。」

サリナは再び地図の清書を始めました。

アランはお母さんに、ベルトに付けるポーチを作ってくれるよう頼みました。

バックの中に入れておいたらイザといつと使いづらいですからね。

おかあさんは、古い皮のバックを手直しして爆光球を2個づつ入れられる仕切りのついたポーチを作ってくれました。

次の日の朝早く、アラン達はマウント・ワンに出かけます。たっぷり休養したので体調、気力ともバツチリです。

入口前の広場にある移動魔方陣に乗り地下1・2階を念じます。

光りが2人を囲み・・それが薄れるとそこは地下1・2階の移動魔方陣の上です。

近くに階段が下に続いています。

階段は2人並んで下りることが出来る位の横幅があります。

アランが先行し、サリナはアランの頭上に光球を1個上げて、周

囲を明るく照らします。

地下1-3階の踊り場にたどり着くと、早速光球を2個増やし部屋の全体を照らします。

今度のフロアは天井がアランの3倍程の高さです。  
そして、広さは・・アランの家なら6軒程このフロアに建ちそつ  
です。

でも・・床が問題です。

踊り場から、床までは、ほぼ腰の高さ・・そして、その床には・・  
一面のスライム・・  
スライムの海みたいです。

確かにスライムは魔物中では最弱ですが・・こんなにいるとなる  
と話は別です。

1匹づつ倒している間に、他のスライムが攻撃してきます。

「どうじょう・・

「試してみる・・【メルダム】」

サリナは部屋一面に群がるスライムの真中に爆炎魔法を放ちまし  
た。  
「オウ・・つて炎が広がり、部屋の中心部のスライムが消えまし  
た。

スライムの消えた床の一部になにやら他と違うものが見えました。  
スライムの消えた床は黒と白のタイルが市松模様に張られていま  
すが、一つ、他のタイルと違つて、なにやら大きなボタンのようにも見えるものがありました。

市松模様の床の見える範囲がみるみる小さくなつていきます。  
不審に思つて周りを見ると、壁の一部に穴が開いて、そこからス

ライムがポコポコとこぼれ落ちています。

「常に一定のスライムがいるようにしてるんだ。・・でも、何処かにその仕掛けを解除するものがあるはずなんだけど・・」

「・・さつきのボタン！」

「でも、どうやって、あそこまで・・！」

「そうか、爆裂球を時間差で爆発させれば、スライムを遠ざけることが出来る！」

早速、アランは白球の紐を引いてメルダムが炸裂した場所までの中間付近に投げます。

バシュー！と炎を周に飛ばしながら白球が炸裂しました。

近くのスライムは消滅し、その周りのスライムは田を回しています。

アランは田を回してスライムを踏み潰しながら市松模様の床まで走ります。

アランが市松模様の床まで行つた事を確認して、サリナが再度メルダムをさつきの場所に放ちます。

「ゴオウ！」という炎の広がりにスライムが消えていきます。

炎が消え去り、ボタンのある床にアランは素早く移動するとボタンを踏みつけました。

ガタン・・何かが作動する音がしたかと思うと、壁の穴は消え去り、スライムの補給はなくなりました。

後は、殲滅あるのみです。

サリナはメルトを乱発し、アランは白球、赤球をスライムの群れに投げつけます。

ボワー！、バシュー！・・・

ある程度数を減らしたら、後は長柄の刃で片つ端から斬りつけました。

3割の身体速度向上が上手く働いて、たちまちスライムの数が減つて行きます。

しばらくすると、市松模様床には沢山の銅貨が散らばってました。2人はバックの中から布切れを取り出してその中に銅貨を集めます。

とても全てを回収できません。2人ははずしりと思い布包みをカバンに入れて、反対側の壁にあいている次のフロアへの道を進むことにしました。

## スケルトンの群れ

スライムの海の反対側に開いていた黒い穴・・・  
それは、更なる地下階への入口です。少し進むと階段がありまし  
た。

「大丈夫?・・・メルダムを随分撃つたけど・・・  
「まだ2発は撃てる。・・・」

アランが心配そうに尋ねると、サリナは首を振つてそう答えまし  
た。  
まあ・・いざとなれば回復薬もありますし・・問題はなさそうで  
す。

2人は、地下14階へ降りて生きました。

階段を降りると早速光球を頭上に飛ばします。  
明るくなつたフロアには・・一面の草原・・まるでアーヴン達が暮  
す村の西に広がる草原のようです。

「あれ!」

サリナが指差す先には、上の階と同じように遙か彼方の壁に穴が  
開いています。

草原の草丈はアランの膝まではありません。  
何処からか風が吹いているようです。わやわやと草原が揺れてい  
ます。

「ゆっくり行こう・・かなり離れてるからね。」

アランの言葉にサリナは小さく頷きました。

歩き始める前に、サリナはさうに上空に光球を浮かべます。2個を上空に、そして1個を頭上少し前です。

見通しは良いのですけど···何か気になります。

しばらく歩いた時です。

ふと、アランは何か気になっていた原因に気がつきました。  
この草原には音が無いのです···

アランの知つてゐる草原は風にそよぐ草の葉づれのサワサワといふ音や、虫鳴く口ロ口ロといふ心地よい音に満ちています。

でも、この草原は···音が無いのです。

草原の草の葉は揺れていますが、音は出しません。歩くと普通なら、いろんな虫が飛び出すのですが、ここまで歩いても虫は一匹もみかけませんでした。

「IJの草原···変だ。急IJIフー。」

サリナに急ぐように促します。

サリナも腑に落ちない様子でしたから、アランの言葉に足を止めます。

突然、前方の草むらが膨れ上がり、ズサーっと草原が弾けました。飛んできた砂を顔を腕で覆つて防ぎます。

その腕を下ろし、前方を見ると···

スケルトンです。

皮鎧に身を包んだ骸骨。足にはボロボロのブーツを履き、片手には剣そしてもう片方には丸い盾を持ち、頭には金属の兜を被っています。

金属は全て赤錆に覆われていますが、カシャカシャと骨の音を響かせて近づいてくる姿は軽快なものがあります。

アランは長柄のわつかを外すと、畳んである刃を出しました。  
そして、サリナの前に立つて長柄を構えます。

サリナも魔法の杖を構え、何時でも魔法攻撃が出来るようにして  
います。

更に、前方の草原が弾けました。  
スケルトンがもう1体増えました。  
あちこちの草原が弾けます。・・次々とスケルトンが増えていき  
ます。

・・10体程度になつた時、スケルトンは隊列を組みました。  
横一列・・そして、ゆっくりとアラン達に近づいてきました。

【メルダム！】

サリナの魔法攻撃です。

スケルトン達の中央に業火が弾けます。

【メルダム！】・・【メルダム！】

続けて、左右のスケルトン達に業火が弾けました。

これで、サリナの魔法力は殆ど使い切つたようです・・サリナは  
バックから魔法回復薬を取りだすと、一息に飲み干します・・これ  
で、少し魔法力が回復します。

アランも、爆裂球を2個取り出すとスケルトン達に投げつけます。

ボワー！！と白球が弾けます。

至近距離で再度の業火に襲われたスケルトンが2体程その場に崩  
れ落ちました。

「ウワワーーー！」

残ったスケルトンに向つてアランは雄たけびを上げて走り出しました。

駆け出して直ぐにアランは体が軽い事に気が着きました。  
軽く駆けることができ、体も軽いのです・・そう言えればお爺さんが加速の効果があると言つていました。

スケルトン達はメルダムを受けて煤けています。  
でやー！つと長柄で袈裟懸けに斬りつけ、柄を返すと下から次のスケルトンに斬りつけます。

肉の無いスケルトンですが、頸骨や背骨を両断すると崩れ落ちました。  
・・どうやら、体の中心線を作る骨が急所のようです。

次のスケルトンを攻撃しようと、体を横に向けた時でした。  
アランの後を取つたスケルトンが剣でアランに斬りつました。  
ガツン！つと肩に衝撃を受けたアランはその場に崩れます。  
止めを刺そうと剣を振り上げたスケルトンに炎弾が当りました。  
サリナが【ファイア】を放つたのです。

「ウウウウ・・ム」

アランが氣がついたみたいです。

目の前に迫つていたスケルトンを長柄の石突で跳ね飛ばします。  
肩はズキズキと痛みますが、幸い、骨は折れていないうえ。  
残ったスケルトンに近づくと長柄を一閃して上下両断します。

サリナも、離れて様子を窺うスケルトン曰掛けて、【ファイア】を連発します。

そして・・ようやく、10体のスケルトンを倒す事が出来ました。

スケルトンがスーと消え去り、銀貨が残ります。

銀貨を拾い集め、サツサと草原を後にします。・・また来たらイヤですからね。

やつとのおもいで壁の穴に着きました。

穴に入ると、途中に短い横穴があり、木箱が置いてあります。アランが中を開けると・・鎖帷子が入っていました。重いので、アランのバックに詰め込みます。

さらに奥になります。

ちょっとした広場があり、移動魔方陣がありました。その奥には下に降りる階段があります。

「今日は、少しヤバかった。・・まだ肩が痛いよ。  
・・戻つて休む。・・明日来ればいい。」

2人は移動魔方陣に乗ると出口に向います。

光りが2人を包み、それが薄れると景色が変りました。入口広場の魔方陣に2人は移動したのです。

そこは真っ暗でした。夜になつていていたようです。

前に焚火をした場所で、また2人は夜を明かすことにしました。

焚火を焚き、バックから小さな鍋を取り出すとお湯を沸かします。菜を入れてスープを作りました。

サリナは、小さなカップにお茶を入れてアランに手渡します。

そして、自分のカップにも注ぐと、残りのお湯に干し肉と乾燥野菜を入れてスープを作りました。

アランは皮鎧を脱ぐと、痛む肩をサリナに見てもらいます。

サリナはシャツを捲つてアランの肩を見て吃驚しました。  
だつて、そこは赤黒く腫れています。鎧びた剣で斬りつけた  
ので皮鎧を切り裂くまでは至らなかつたようですが、衝撃は肩まで  
しつかりと届いたようです。

## 【ヒール！】

サリナは癒しの魔法を唱えます。

魔法の杖から柔らかな白い光がアランの肩に収束していきます。  
すると・・段々と肩の腫れが引いていき、赤黒い患部も日に焼け  
た肌色に変つていきました。

「・・・凄い！・・・痛みがスーっと引いたよ。」

「前に、貰つた魔法・・役に立つた・・」

調子を確かめるよつて肩を回しているアランを見て、サリナは言  
いました。

出来上がつたスープを木のお椀に入れて飲むと、焚火の傍に横に  
なります。

最初の火の番はアランです。

さつきのお礼に朝まで寝かせてあげよつて思いながら小さくな  
つた焚火に薪をくべました。

## 迷宮外で狼退治（1）

次の日の朝早く、2人は山を下りて「ギルド」に向います。ギルドの扉を（おはよつー）って声をかけながら開けると、テクテクとカウンターのお姉さんがこちらに行きます。

「おはよう」だこます。・・あのう・・お爺さんは？」

「おお・・坊主じもか。何ぞ、面白こものでも見つけおつたか？」

奥からドアーハーのお爺さんが出てきました。

「じれなんですけど・・」

お爺さん、鎖帷子を渡します。

随分と古臭いもので、全体が茶色に染まっています。

おじいさんも、胡散臭げにみていましたが、不意にあることに気が着きました。「この鎖の編み方をどこかで見た様な気がしたのです。

「見たところは、古い鎖帷子だが・・少し気になるといふがある。明日、取りに来い。」

「お願いしますー」

アランはお爺さんに向ひ、ギルドを後にします。

「私も気になりますね。・・お爺さんが気になるって所に・・」

「いやな・・この鎖の編み方なのが・・普通はこのようには編む事は無い。布状に作った鎖を連結用の環で閉じてお終いなんじや。・・ところが、これは・・糸を編んだように作られておる。そんな

鎌帷子を昔どこかで見た記憶があるんじゃが……

「意外と伝説の鎌帷子とか？」

「いや・・そんなものではないと思うが・・・」

そう言つと、お爺さんは事務所に帰つていきました。

一方、アラン達は村の雑貨屋さんへ向いました。

今回の迷宮探索では、爆光球が大変役立ちました。そこで、もう少し補充しようと思つたからです。

「おはよう」やります。！」つてお店に入ります。

「誰だ！つて、アランじやねえか。・・どうした？」

「また、爆光球が欲しいんですけど・・赤、白共に5個お願ひします。」

「・・この間も買つて行つたよな？・・強い道具はそれなりに使い場所があるんだ。あまり使つてばかりいると依存するようになる。それでは冒険者失格だぞ。」

「十分判つてるつもりです。でも、やはり使わなければ今日此処に来れませんでした。使いどころは間違つていないと思つてます。」

「それならいい。ほら、5個づつだな。毎度あり！」

雑貨屋の叔父さんの言葉は、耳痛い話です。

道具を使う・・確かにT P Oがあるはずです。・・少し先を急ぎすぎたのかも知れません。

家に帰えると、もう直ぐお昼の時間でした。

お昼を食べながら、お母さんにマウンテン・ワンの迷宮の出来事と雑貨屋さんの話をして、意見を聞きます。

「そうね・・確かに、無理しそうてるのかも知れないわ。・・雑貨屋さんの言う事は、お母さんは正しいと思うわよ。・・道具に頼らない。これは、大事な事よ。・・でも、こんな時こそ、この道具・

・ といつ言葉もあるの。」これは、貴方のお父さんがよく言っていた言葉だから覚えておいて損はないわ。」

「少し、別の仕事もしたほうがいいのかな？」

「あと少しで地下20階・・・」のままで行けば、3回行けば何とかなる。」

「のまま進む、それとも一度他の依頼を行つてみる・・・2つの選択肢があります。

とりあえず、お風呂に入りゆっくつと眠りながら考へることにして

ました。

「サリナ！・・・寝た？」

「・・・起きてるー」

ベッドで他なりのベッドにいるサリナに話しかけました。

「・・・考えてたんだけど・・・1日だけ、迷宮探索を休んでギルドの依頼をしてみようよ。・・・冒険者になつてからずっと地下迷宮探索をしていたけど・・・冒険者は迷宮探索だけの仕事じゃないはずだ。・・迷宮探索後の仕事をする上でも、一度経験してみようと思つんだけど・・・」

「・・・いい。付いてく。」

早速次の日、冒険者の普通の仕事？・・依頼による薬草採取等をしてみようとい、ギルドに出かけます。

依頼用紙が張つてある掲示板には直ぐに行かずに、先ずはカウンターのお姉さんへ挨拶です。

「おはようござります・・僕達のレベルを鑑定してくださー・・

「ちよつと待つてね・・ヨイショー！」

お姉さんが取り出した水晶球を両手で持ります。水晶の中に一瞬光りが走るとレベル鑑定終了です。アランの次にサリナが同じようく水晶球を掴みます。

アランとサリナからギルドカードを受取り、カウンターにある箱の中にカードを入れます。カチーって小さな音になるとカードの更新を含めたレベル鑑定が終了します。

「あらう・・アラン君・・少し急ぎすぎてるみたいね。LV18は、もう一人前と言つてもいいわ。・・でもね。あまり急ぐことは無いの。マウント・ワンは貴方が地下20階を制覇して地図を作らぬ限り、誰も入れない場所なのよ。・・冒険者の始まりは経験の積み重ねつて言うくらいだから・・いろんなことにチャレンジしても良いと思うんだけど・・」

「そうですね。・・実は、今日来た目的の1つに掲示板で僕達が出来るものを探す事があるんですよ。・・冒険者には成ったけど・・掲示板での依頼つて未だやつたことが無いんですけど・・」

「なんだ・・じゃあ、簡単に説明してあげる。掲示板は、ギルドのカウンターから右側が初心者用、左が中級者以上の依頼につてるのである。」

「初心者用と言つても、5レベル毎に掲示板を区分けしてあるの。入口近くがLVが5まで、次がLV6から10・・というふうになつてゐるわ。最後の掲示板がLV16からLV20だから、アラン君はそこか、その前あたりで探すと自分の実力に合つた依頼が見つかるはずよ。」

「LVを上げるには3回ほど自分のレベル以上の依頼をしなければならないの。アラン君がこれまでレベルを上げてこられたのは、自分のレベル以上の魔物を退治したからよ。」

「・・それと、依頼用紙に書かれた必要レベルはあくまで目安でしかないわ。LV15と書かれていても、LV20相当の魔物が出

る」もあるわ。・・かなわないと判断したら逃げるのよ。」

「冒険者は臆病なくらいでちょうどいいわ。勇気なんてひとつと捨てて来なさい。」

最後は少しお説教じみていましたが、近くの中年の冒険者もしきりに頷いていました。

ということは、臆病といつ言葉に深い意味がある・・とにかくどうか。

レベルが上ったから、サリナちゃんはメルダムが8回できるね・・アラン君も魔法が使えるんだから練習しないとダメよ！なんていつてましたけど・・その内練習しようつてスルーしてます。

壁際の掲示板に歩み寄り、依頼書を1つづつ確認します。

LV16～20の依頼書は材料の入手が殆どです。

でも、その材料が問題です。殆どが魔物がたまに落とす武器、防具や装飾品なのです。

「・・これ！」

「・・え？・・灰色狼の討伐・・LV17程度、報酬銀貨5枚。

東南の森に移動してきた群れを壊滅して欲しい。依頼達成は牙を20個以上とする・・」

狼はこの間、地下迷宮で戦つたばかりです。

アランは爆光球とメルダムで、ある程度楽に退治できると考えました。

「うん・・これにしよう・・。狼はこの間やつつけたしね。」

サリナも小さく頷きました。

掲示板から、依頼書を引き剥がすと、お姉さんの所に持つていきました。

ます。

「「」れを受けたいんですが・・・」

「・・狼退治ね・・アラン君がLV18なら何とかなるかも。」

お姉さんは依頼書に「デン-!-と対応中の印鑑を押します。

「今田から、5日間で狼の牙を20個集めるのよ。・・頑張つて

!-!-」

「「はい!-」

依頼書を受取り、サリナはカバンに大事そうに詰め込みました。  
一旦家に帰ると冒険の準備です。

5日間の食料等をカバンに詰め込み、毛布等は肩に斜めに背負つてます。

そして、村の南の出口に向います。そこから伸びる荷馬車が通れるまどいの道は、ずっと南で街道に合流します。

これから向う南東の森は、街道の手前で東に進む道を辿ると行けます。

## 迷宮外で狼退治（2）

街道の手前にある小さな祠から森への小道が分かれています。  
「どうか、無事に完了出来ますように！」つて、アランはお弁当の硬く焼かれたパンを少し千切つてお供えします。サリナも途中で摘んだ野の花をお供えしました。  
生死を分ける仕事ですから、頼れるものは頼ります。信仰心つてこんな事から深まつていくんですね。

小道を進むと、森に入ります。  
山の森ではなく平原の森ですから、起伏はあまりありません。見通しが悪いのが困りものですけど・・  
更に進むと茂みも多くなつて、辺りも薄暗くなつてきました。  
アランは咄嗟に獣と出会つても対処出来るように、長柄のワッカをすらして刃先を出しました。  
長柄の真中辺りを肩の幅で握つていれば、何時何が出てもとりあえずは対処できます。

進むにつれ、周囲の立ち木も太く、高くなります。・・枝葉で空も見えなくなりました。

此れでは時間が判りません・・お腹のスキ具合で判断する事になります。

「サリナ。お昼にしない？」

少し開けた場所に出た所で、休憩をサリナに提案します。  
サリナは小さく頷くと、道の脇に大きく根を張り出した大木のところまで行つて、根に腰を下ろしました。  
アランも並んで座ります。

お母さんが作ってくれたお弁当は固焼きパンにチーズとハムと野菜を挟んだサンドです。水筒のお水をカップに半分注いでお水を飲みながら美味しく頂きました。

狼退治の依頼ですが・・この森のどの辺にいるのかの情報はありません。今日はこのまま森の小道を進むことにしました。

お昼を食べてだいぶ時間が過ぎました。

森の中が少しづつ暗くなり始めます。夕暮れ時のようにです。

急いで野宿をする場所を探しますと、岩が重なって隙間が出来ている場所を見つけました。

小さな岩に大きな岩が斜めに重なって、3人位雨宿りが出来そうな隙間です。岩の前はちょっとした空地になつており土が露出しています。

以前誰かが野宿したようで、焚火の跡と小枝が少し隙間にありました。

早速、アランは周囲を調べながら薪を拾います。

サリナは小枝を集めて、焚火を始めました。よく燃え始めたところで、小さな鍋を火の傍においてお湯を沸かします。

「拾つてきたよ・・此れだけあれば大丈夫だろ。」  
「座つて、お茶を入れるから・・」

アランは焚火の横に薪を積み上げました。

アランがやつと座ると、サリナはお鍋のお湯でアランにお茶を入れてあげました。

お鍋の残りのお湯に乾燥野菜と干し肉を刻んで入れると簡単なスープの出来上がりです。固焼きパンを焚火で炙ると少しだけやわらかくなります。それをスープに浸しながら食べました。

タゴ飯を食べ終えると、後は寝るだけです。

でも、まだ眠くはありませんから森の音に2人で耳を傾けます。森の夜は賑やかです。

遠くでふくろうがホー、ホーって鳴いてますし、近くの茂みでは虫達がコロコロ・・ギーギーと鳴いています。

少し煩いぐらいですが、この音は重要な意味があります。音が止まった時・・それは、危険な獣が近づいた時です。

今は、鳴いていますから、安心して食後のお茶が楽しめます。

2人でマウント・ワン<sup>イシ</sup>探索の反省をしたり、サリナにアランが光球の魔法を教わつたりしていると夜が更けてきます。

「サリナ、先に寝てよ。僕はまだ大丈夫だから・・」

アランの言葉に頷いて、サリナは丸めて背負つてきた毛布を広げ、それに身を包むと岩の窪みに横になりました。

丁度、アランの後になります。アランは腰の後に差してある片手剣を抜いて自分の左に置きます。

咄嗟の場合は短い武器のほうが取り回しがしやすいからです。

長柄は間違つて焚火で燃やす事が無いように右側に立てかけてあります。

虫の音も気にならなくなりました。小さくなつた焚火の火に薪を注ぎ足します。

辺りは真つ暗闇です。

焚火の明かりが家1軒分位の空間を明るく照らしています。

焚火の火が弱ると、スーっと明るくなつていていた空間が狭まります。そして、また薪を追加すると明るい空間が広がります。

そんなことを繰り返していた時、突然アランは気が着きました。

虫の鳴く音が聞えません・・

静かに、なるべく体を動かさずに、左手で片手剣を握ります。

同じように、右手で薪を握り薪火に追加します。・・1本・・2本・・3本・・

ガルルルル・・・

何か獣の唸るような声が周囲から聞えてきました。

どうやら、囮まれているような気もします。

勢い良く燃えだした焚火の明かりで、獣の目が光つて見えます。

目の位置は低く、群れを作り、唸り声を上げる・・狼です。

アランはゆっくりと立ち上がり長柄を握ります。左手の片手剣を腰のケースに戻すと、ポーチから爆光球を2個取り出しました。まだ、狼は唸っているだけです。少しづつ囮みを狭めているようにも感じます。

爆光球の紐を引いて、目が光っている辺りに投げつけます。更に、もう1個を投げました。

ドーン・・ドーンと爆光球が爆発しました。

キヤン・キヤン・・という叫びが聞えます。何匹かを巻き込んだようです。

グゥウウ・・という低い唸り声に変ってきます。

ガウオオン・・一匹の狼がアランに飛び掛りました。アランは長柄の石突で狼の胴を思い切り払いました。ボキッという鈍い音を立てて焚火の向こう側まで飛んでいきます。

更に一匹が襲い掛かります。長柄を腕で回しながら斬りつけようとした時、飛び掛ってきた狼の顔面に火炎弾が着弾しました。ボオンって狼の頭がはじけたように火炎に包まれました。

「起きた・・攻撃する！」

サリナの言葉にアランは励されます。

アランが前面で攻撃と防御をすれば、サリナが後で確実に魔法で攻撃してくれるからです。

「メルダム！」

サリナの魔法で狼が纏めて葬られます。

近づく狼は、アランが確実に一匹づつ仕留めていきます。

「シャイン！」

アランの魔法が成功して、頭上に光球が形成されました。周囲が更に明るくなります。

狼達は空地を取り囲むようにして此方を窺っています。  
まだまだ数が足りそうもありません。

「メルダム！」・・「メルダム！」・・

サリナが狼達の群に魔法を立て続けに放ちます。

アランも腰のポーチから爆光球を取り出して、魔法攻撃を免れた群に投げつけます。

そんな攻撃がどの位続いたのでしょうか、

ワオオオーン・・群の一匹が一声高く叫ぶと、群はたちまちアラン達から遠ざかりました。

呆然とアラン達は狼を見送ります。

何時しか夜が明けていたようです。森の中が遠くまで見渡す事が出来ます。

2人で倒した狼を一箇所に集めます。

数えてみると35匹もいます。依頼は20匹ですから、これだけ

倒せば十分ですね。

早速サリナが牙を集めていきます。

その間に、アランは空地の外れの方に片手剣で、大きな穴を掘りました。

いくら獣でも、そのまま死体を山積みでは氣の毒です。きちんと埋める事にしました。

倒した狼を埋め終えると、どつと疲れが出てきました。

お茶を飲みたいと思いましたが、その気力もありません。残り少ない水筒の水で我慢します。

しばらく休むと疲れも取れます。

早速、森を抜け村へ帰ることにしました。

ひたすら森の小道を戻っていきます。

途中、昼食を取つた大木の根っこに出会いましたが、軽く休憩を取つただけで先を急ぎます。

時間が判らないので、何時暗くなるか判りません。夜になる前に出来るだけ森から出ようと2人は考えました。

そして、2人が森を出た時には、すっかり日が暮れた後でした。急いで小道を走り抜けます。

小さな祠の前に着くと、祠の扉を開けて中に入りました。祠の中は立つ事は出来ませんが、屈んでいれば、3人位入ることができます。

祠の扉を閉めると、やつと一安心です。・・さつきから何かが後から追いかけてくるような気がしてならなかつたからです。

御神体に一夜の宿を借りることを詫びて、やつと横になることが出来ます。

お腹がすいたような気がして、今日は一日何も食べていない事に

気が着きました。

水筒に残った水を2人で分けて、干し肉を齧ります。

そして、毛布を広げ2人で仲良く眠ります。不寝番はいません。  
小さいけれど頑丈な祠ですし、何といっても神様と一緒にですからね。

「土地神よ、その2人を渡すがいい。」

「我が許に庇護を願いたる者を、何故その方に渡す必要がある。」

「我が一族を必用以上に殺戮したもの有何故、その方は庇護するのじや。」

「誰もが忘れようとしている土地神に花を供え、自らの食するものを我に供物として分けてくれたのじや・・御主なら・・山神なら、信心の心は理解できるはず・・」

「信心とな・・確かに、2人の殺戮は日に余る・・しかし、亡骸を葬ることを理解していることも確かだ。」

「ここは、わしに免じて許してやらぬか・・」

「ここで、許せば、また殺戮を繰り返すこともありつる・・」

「では、この2人に乗り移り、上手く御すればよいであろう・・2人は若い・・若いが故に必要以上に殺戮を起したようにも思える。事にしよう・・」

「流石は、山神。・・それでこそ人に恐れられ、そして敬われる神である。」

「あすれば、土地神よ。・・結界を一時緩めるがよい。その男に憑依する。・・そして、我の留守の間、眷属の面倒を頼む。・・暴

れるものを誅するのはよい。しかし、穏やかに迺<sup>ハシ</sup>すものを殺戮するのを決して許さんでほしい。」

「承知・・土地神同士の結束を甘くみるでない。その約束、違わず時に時を過<sup>ハシ</sup>」そう・・結界は解いた。憑依いたせ。」

アランは夢を見ていました。

途轍もなく強い何かが、アランとサリナを森の奥から追いかけてきます。

アラン達は必死に逃げましたが追いつかれそうです。

その時、不思議な祠を見つけました。

その中に逃げ込むと同時に意識を失ってしまいました。

でも、遠いところで誰かが、誰かと議論していることが判るのです。

体がユサユサと揺らされます。

ウゥン・・って小さく唸り声を上げると、パツッと目が覚めました。

た。

「・・うなされてた・・」

どうやら、何か変な夢をみていたようです。でも何の夢だったのかは覚えてません。体中に冷や汗をかいていますから、悪夢の一種だつたようですが・・

「それ！・・昨日は無かつた・・」

サリナがアランの左手を指差しました。

アランが自分の左手を見ると・・左手の甲に赤い刺青のよつなものが浮び出でています。

痛くも、痒くもありません。・・よく見ると、獣の顔のよつにも見えます。

「何だろね・・僕も気が付かなかつた。ぶつけた訳でもないのに、  
変だね。」

手を握つたり開いたりしても故障はありません。

改めて、辺りを見渡すと昨夜、何かに追い立てられるように森を抜けて辿りついた小さな祠の中でした。

今は、あの不安な心持しが無くなっています。

2人は丁寧に祠にお礼を言つと、むらへの道を急ぎました。

村に付いた時は丁度お昼時です。

ギルドに報告した後で家でお昼を食べようと考えて、ギルドに行く事にしました。

「こりこりはは！」つて、ギルドの扉を開けました。

「あら・・もう終わったの？」

カウンターのお姉さんが不審げに問いかけてます。

「はい。・・これがその証です。」

アランとサリナはバックから狼の牙を取り出します。

その時、お姉さんはアランの左手の痣のようなのを囁さとく見つけました。

「ハツ！・・ちょっと待つてね。」

急いで事務所に戻ります。

何か、事務所の中で騒いでいるような声も聞えますが・・アラン達には理由が判りません。

しばらくすると、ドワーフのお爺さん、カウンターのお姉さん、始めて見るヒルフのお姉さんの3人がやってきました。

「坊主ー・・左手を出してみる。」

お爺さんに言われるまま、左手を出します。

3人はその痣のよつな、刺青のよつな模様をじばりくみてこましたが、

「これは、ただの痣ではない・・何が起きたかを詳しく話してみる。」

アランは今回の狼討伐の経緯を話します。

途中の祠にお参りしたこと。

狼の大群に取り囲まれたこと。

討伐の証を手に入れた後で、死体を埋葬したこと。

何かに終われるように森をあとにしたこと。

そして、祠にたどり着いた後、不思議な夢をみたこと・・

「やはつそうなのですね。・・エルフの古い言い伝えの通りです。

「わしの子供の頃にお袋に聞かされた昔話にもあつたな。エルフとドワーフにはこの痣の秘密がわかるようです。」

「あのう・・何なんでしょうか。ひょつとして呪いとか? 恐る恐るアランが聞いてみます。

「そんな生易しいものじゃないのよ。それはー!」

「それは、呪いではなく・・そうじやな・・祝福・・に近いか。」

「祝福・・というよりは、体現かしら?」

「あのう・・もつと判りやすくお願ひします。」

アランはあつぱりと言いました。

「神の憑依じゃよ。」

「貴方に何かを伝えるために神様が貴方に乗り移つてゐるよ。」

「ええ！！」

「アランは神様なの？」

「普段は全く何も起らぬ・・しかし、神がそれをお前に教えようとする時何がが起こるはずじゃ。」

「僕に害するものではないのですね。」

「逸れは無いわ。貴方に何かを教えたくて神は憑依したの。・・

ある意味、神は貴方を認めているの。」

「それで・・祝福なのですね。少し理解できました。」

「それに、その痣は、貴方が憑依した神の教えを理解したと判断すれば無くなるわ。」

「少し、安心しました。・・もう取れないんじゃないかと思つてましたから。」

「それと、その印は、山神様の印・・一部の獸は貴方に従うでしょう。でも全てではない。そのことに注意してね。」

「それにしても、憑依印とは・・長生きはするものよ。・・おお、そうだった。坊主に預かつた鎖帷子だが、ちょっと待つてあれ。」

「

お爺さんは事務所の奥に行つてしましました。

エルフのお姉さんも、いいもの見せて貰つたわ。なんて言いながら帰つていきます。

「『』めんね。ちょっと判らなかつたから、2人を呼んじやつた。・

・ そうだ。換金がまだだよね。ちょっと待つててね。・・はい。依頼完遂で銀貨5枚。それに、15匹分の牙は、全部で銀貨3枚。合

わせて銀貨8枚です。」

お姉さんは、サリナに銀貨を渡しました。

しばらぐへると、奥からお爺さんがピカピカの鎧帷子を持って来ました。

「これじゃ。・・・よく見てみる。少し金色が混じった銀色じゃ。・・・ミスリルじゃよ。しかも、この編み方は魔法封じの編み方じや。昔一度見たことがあるから覚えちよる。・・・王都でも滅多に見ることは出来ぬじやねづ。出来れば服の下に着ると良い。不心得者がおらぬとも限らん。」

「そんなに凄いものなんですか?」

「凄いなんでものじゃないぞ。・・・売れば金貨10枚は下らぬ。・・・いいか。絶対に上着の下に着るのじや。人に見せるな。・・・よいな。」

アランは、そんなに凄いのかな?って思いましたけど、お爺さんの真剣な顔に負けて、判りましたって頷いてます。  
その後は家に戻り、昼食です。

食事を取りながらお母さんに不思議な癌の話をします。

お母さんは、最初癌を見て吃驚してましたが、アランの話を聞いて安心しました。

山神とは、狼のことだとお母さんは気がつきました。

アランに何かを教えるまではアランと共にいる・・それは狼の守護を持っていることと同じです。

少し向こう見ずなところがあるアランにとってそれは益にはなつても害にはならないはずです。

迷宮以外で始めての冒険は、2人には厳しいものでした。ずっと迷宮で魔物と戦つてきましたから、ある程度強くなつてきましたかと思いましたが、狼の大群を前に少し怖気づいた事も確かです。何でそななんだろ？・・アランはベッドの中で眠らずに考えてみました。

動き？・・迷宮の魔物も俊敏な動きをしてました。

群れ？・・もっと群れて一面スライムなんて時もありました。

・・・ううだ。目だ。・・獰猛な獣の放つ眼光！・・それは魂の輝き・・

目が違つてたんだ・・

魔物と僕達の違い・・魂の有無・・各下の者を哀れむような、それでいて確実に殺すと意志が込められた目が違つていたんだ。

まだまだ覚悟が足りないのかな？

（足りないのは経験だ・・）

何処からか声が聞えてきました。

キヨロキヨロと辺りを見渡しますが、サリナはぐっすり寝ているようです。

経験か・・確かに、まだ冒険者になつて2ヶ月も立つてないや・・そう呟くと、疲れてるのかなつて感じたのか寝てしまいました。

次の朝、朝食を食べながらサリナに相談してみました。

「今日は、どうしようか？・・マウント・ワンにする？・・それとも新しい依頼をギルドで探してみる？」

「アランが決めた方でいい。」

「今日は、サリナに決めて貰いたいんだ。」

その言葉を聞いたサリナのスプーンは止まってしまいました。ジッとお皿を見つめて考えています。

やがて、スプーンをテーブルに置くと、アランを見つめました。

「マウント・ワンはもう直ぐ地下15階。マスターは20階までの地図が出来ない内は他の人を入れないって言つてた。なら、早く攻略してあげたほうがいい。」

珍しくサリナの長い言葉でした。

「そうだね。ちょっとした息抜きの気持ちで外の依頼を受けたけど・・息抜きで出来る仕事なんか無いんだね。」

サリナはアランの言葉に小さく頷きます。

食事を終えると早速探索の準備です。

水、食料、薬草等をバックに詰め込みます。アランは皮の鎧の下に早速ミスリル銀の鎧帽子を着込みました。重いと思つたのですが、着てみると普通の服のような軽さです。動きも負担になるようなことがありません。

お弁当をお母さんに渡されると、家を出て雑貨屋さんに向います。狼の群れに殆ど爆光球を使つてしましましたから、その補充をするためです。

マウント・ワンの入口広場に到着した時には昼近くになつていました。

何かひさしぶりに入るような気がします。

中で昼食というわけにもいかないので、入る前に昼食です。・・

この後何時取れるか分かりませんし、安心して食事等出来ませんからね。

ゆつくりと水筒に入れた水を飲むと、サリナを振り返ります。サリナも休憩時間を十分取つたことで山登りの疲れも取れたみたいです。

移動魔方陣に2人が乗ると、アランは探索の最後の階・地下1階を思い浮かべます。

魔方陣から光りが上がり、2人の周りを取り囲んで回り始めます。光りが薄れ周囲は暗くなりました。

地下14階に到達したみたいです。

サリナは光球を2人の上部に飛ばします。

周囲がたちまち明るくなると・地下15階へ下りる階段が直ぐ傍にありました。

アラン達は光球で周囲を照らしながら、ゆつくりと階段を下りていきます。最初の頃はようやく2人が並んで下りることが出来る位の横幅でしたが、下るにつれ段々と横幅が増していきます。横に3人・・5人・・と並べる位に増してきました。

よく見ると、階段の材質も変化してます。

下り始めたころは、切り出した石を並べたような無骨な造りでしたが、途中から磨き上げたような1枚の石材になり、今歩いている所は・・大理石に見えます。

そして、ようやく地下15階の踊り場に到達し、周囲を見渡した2人の目に映つたものは・・神殿でした。

長い階段の理由が少し理解できました。

光球で照らされた天井は高く、このフロアの大きさも村を凌ぐ程

です。

踊り場から真直ぐに磨かれた大理石の道路が走っています。道の両側には、太い柱が連なつており、柱の上部は石の梁が横に渡されていますし、梁には見事な彫刻が施されています。道の外側は・・そこは浅い水の流れがあります。高低さがあまりないのか、水音はしません。

光球が水面にも反射されるため幻想的な雰囲気です。

恐る恐る2人は道路を歩き始めました。

殺氣みたいな嫌な雰囲気はありませんが、長柄のワッカを外し刃先を出しておきます。

更に、サリナは光球を1個追加しました。2人の前後に光球を上げて2人の移動に追従させます。

柱の梁に彫られた彫刻を何気なく見ていたアランは、ふと気が着きました。

彫刻は進む方向には緻密な描写で物語が彫られていたのです。裏には一面の花の彫刻があるだけです。

どんな物語なのかな?つて最初まで急いで駆けて行くとじつくり彫刻を観察します。

それは、古代の物語・・大陸の火山がその勢いを保つていた頃のこと・・

大陸を制覇した帝国が・・魔物との戦いに明け暮れていた頃・・最強の魔物の出現により、帝国が滅びようとした時・・

1人の英雄が現れた・・英雄は魔物を滅ぼした。しかし、英雄を人々は突き放した・・

あまりの強さゆえ・・人々は英雄を追放した・・

英雄が去った後・・魔物は再び帝国を襲つた・・しかし、英雄は

もういない・・

魔物の軍勢が帝国の市民を蹂躪した時、ときの王女はわが身と引換えに魔物の殲滅を神に祈る・・

神はその願いを聞き届け、魔物は去つていった・・そして、王女は息を引取つた・・

皇帝は嘆き・・悲しみ・・そして、姿を見せない英雄を呪つた・・皇帝は賢者に命じ、王女の魂を現世に留める・・唯1人の娘を神の元ではなく自分の傍に置きたかつた・・

亡骸を地下迷宮に神殿を作つて埋葬し、魂は自分と共に・・

しかし、魂は皇帝の許を離れ何処かに姿を隠す・・

地下神殿は迷宮と共に封印する・・魔物を放ち、仕掛けを施し・・山を破壊して土に埋める・・

アランが彫刻をジッと見ると、何処からか彫刻の解説が頭に中に入つてきます。

サリナがどうかした?つて顔でこっちを見ています。

「・・不思議な話だけど・・この彫刻の意味が解るんだ。・・昔、帝国を救つた王女を埋葬した神殿みたいなんだけど・・

「その辺のせいかも知れない。」

サリナがアランの左手を指差しました。

彫刻を見始めてから、少し癌がくつきりと浮き出でているようにも見えます。少し熱も帯びているようです。

「でも、それは昔の話だ。・・先に進もう!」

更に道を進むと、横道があります。・・正確に言つと道が左に直角に曲がっています。真直ぐに進む道もあるんですが、そちらの道は横幅が急に狭くなり敷石も粗雑な切石です。

左に道を曲がると、同じように両側の柱は続きますが、柱の上部の梁はありません。

柱は1本1本に花の彫刻が施され、柱と柱の間には、左側に女性、右側に男性の等身大の彫像が置かれています。

彫像の顔つき、表情は皆少しづつ異なります。1体毎に誰かをモデルにして作り上げたように見えます。

何時しか道は緩やかな上り坂になっていました。・・そして、突然に2人の前にそれは現れたのです。

真っ白な、雪で設えたような・・四角錐・・それだけでアランの家の3倍位あります。

道は、その四角錐に向つて伸びていました。

四角錐の前の広場で道は途切れました。

そこは、正面のアランの身長程で腰の高さの石の台と、左右に5本づつある燭台らしき低い柱がありました。

2人で手分けして広場を調査します。

「何も無い。」ってサリナがアランに振り返りながら言った時です。

アランは左手を石の台にかざしています。そして、その手が淡く光っています。

慌てて、サリナはアランに駆け寄りました。

アランの光った手が石の台を撫でると、鏡のよじに磨かれた台の表面に文字が浮かび上りました。

アランが小さく呟いています。

「・・よつて、此処に王女を埋葬する。・・願わくば、英雄たる

者よ、王女の最後の願いである帝国の未来をその手でにないたまえ・

・

そして、アランが左手を台に触れると・・表面に波紋のように光りが広がりました。

左手が台の中に沈んでいきます・・石の台でしたが、水に手を入れるように光りの波紋を浮かべながら沈んでいきます。

台の中の何かを操作する様子がサリナにはわかりました。

ガコン・・

大きな音に其方を見ると、真っ白な四角錐に斜めの口が開いています。

アランの不思議な行動が、四角錐の扉を開ける鍵だつたようです。

## 魂を持つ人形

ゆづくつと、アランの左手が石の台座から引き抜かれていきます。サリナがアランの顔を見ると、顔が蒼白になつていますが、額には薄らと汗が浮んでいます。

そして、左手が完全に台座から抜かれた時、アランはその場に倒れてしまいました。

「ウゥン・・あれ！　此処は？」

「まだ、休んでて。」

アランはサリナの腕の中で気がつきました。  
そうは言つても・・と、アランは起き上がります。  
どうやら、気を失つていたようです。  
(確かに、台座を調べてたような気がするけど・・) 思い出そうとすると頭が痛くなつてきます。

「僕どうなつたの？」

「左手が光つて、台座の中に手を入れてた。なにか、台座の中でしたようだけど、分からない。」

そんな馬鹿なつてアランは石の台座を見ました。

でも、そこには何もありません。

サリナが、台座の先を指差します。

ええ！つてアランは驚きました。さつきまでは無かつた四角錐にポツカリと四角い穴が開いているのです。

「行つてみよつー。」

アランの言葉にサリナは小さく頷くと、アランの後から四角い穴に進んでこきます。

「シャイン！」

アランの魔法で2人の頭上に光球が浮びます。

四角錐の中は、ガラスのように透明な壁材で作られた通路が続いており、その先にアランの家程の空間がありました。部屋もガラス状の材質なので、2人の上に浮ぶ光球の光りが複雑に屈折して幻想してしてしまいます。

でも、その部屋の中心にある銀色の四角い箱は、それ 자체が薄らと輝いているためか、妙に存在感が感じられます。

「何だろう？」

「解らない。でも、アランなら開けられると思つわ。」

箱をよく見ると、アランの身長程の横幅です。表面には、緻密な描写で一面に花模様が彫刻されています。

箱の高さは、アランの腰ぐらいです。そして、上面から掌程下側に全周を取巻く薄い割れ目が見えました。

これつて、棺なのかしら・・

そんな事を思いながら、アランが石の箱に手を触れた時です。

突然、部屋の壁の奥から、暖かい光りが降る注ぎました。部屋の全ての面から光りは降り注ぎます。

そして、独りでに石の箱が開きました。

石の箱の内部からも光が漏れ出します。

アラン達のいる四角い空間は光りに満ち溢れます。

そして、緩やかに光は脈動はじめました。まるで、光り 자체が命を持つているよつにも見えます。

「見て！」

サリナが石の箱を指差しました。

石の箱の中から、一際赤い光りを放つ球体が浮かび上がってきたのです。

球体の放つ光は、ドクンドクン・・と周囲の光の脈動に合わせて、点滅を始めました。

そして、突然に壁の光りが全て消えます。

球体の赤い光りだけが、周囲の透明なガラス質の壁に吸い込まれ、そして、乱反射します。

赤い光は、だんだんとその色をえて、白い透き通るような光りに変化してきました。

(・・私の眠りを覚ましたのは貴方達ですか?)

アラン達の頭の中に不思議な声が聞えてきました。

「この、四角錐の壁を開いたのは私だと思います。でも、封印を破つた覚えはありません。」

(このストーパの封印は台座の仕掛けを解除しなければ開かねはず。ストーパを開いた以上、貴方が封印を解除したことになります。)

「破つてはいけなかつたのでしょうか?」

(制約はありません。ただ、私が自由になるだけです。)

「貴方を自由にした場合、問題があるのでしょうか?」

(それはありません。私が望む物は、民の安寧ですから。)

「貴方は、誰なんですか?」

(古い帝国の娘です。今は、魂だけの存在。)

「僕達はこの迷宮を探索しています。貴方が自由で、僕達の脅威

にもならないのであれば、このまま更なる迷宮探索を行いたいのですが・・・

（では、私を自由にしてくれたお礼に貴方達の力になりましょ・

・待つてください・・・）

脈動する光りを放つ球体はスーっと石の箱に入つていきました。そして、しばらくすると再び周囲の壁から光りが漏れ出てきました。

何が始まるのだろうと2人がキヨロキヨロと辺りを見渡したときでした。

石の箱から、腕が出てきました。真っ白な腕です。そして、箱の縁を掴みます。

ゆつくりと人影が箱の中から上半身を起しました。そして、2人のほうに顔を向けてます。

卵型の顔は腕と同じように真っ白です。整った顔立ちは美人とうには上品過ぎます。

でも、まるで生氣がありません。

さらに人影は箱から体を立ち上がりさせました。銀色の煌びやかな鎧に身を包んでいます。

箱から足を出し、2人の方に歩いてきます。

（準備が出来ましたよ。さあ、出かけましょ・う！）

2人の前に立つたのは、精巧な細工を施した人形でした。その人形は思念の形で2人に話しかけているのです。

「えつと・・何て呼べばいいのか・・」

（アルテミナス・ドム・レギウス・・アルトでいいわ。）

そう言つと、スタスタと石の箱に戻つていきます。箱に身を屈め

て1本の杖を取り出しました。

（私は、魔法を使います。力になれるでしょう。）

力になれるでしょうって言われても・・

アランは困つてしましました。言葉遣いが丁寧なのは何とかなるにしても、見た目は2人と変わりなくみえますが、その正体は精巧な人形なのです。

村に連れ帰つたら、どんな騒ぎが起きるとも限りません。

「ギルドマスターと相談・・」

サリナがアランに向つて言いました。

「そうだね。それがいいと思つ。アルトさんでいいですね。一度村に帰り、僕達の所属するギルドの上の人と相談したいんですが、着いてきて貰えますか？」

（いいですよ。）

アランは四角錘をでて、石の台座がある広場に出ました。サリナとアルトが後から着いてきます。

外に出るため、14階の移動魔方陣まで戻ろうと広場を歩き始めた時です。

（外に出られるのですか。）

「はい。一度迷宮を出て、村にもどります。」

（では、私の傍に寄つて、村の戻りたい場所を思い浮かべてください。）

アラン達はアルトの傍に寄つて、村のギルドを思い浮かべました。すると、3人の周りに突然魔方陣が浮かび上がります。

そして、光りが周りを取り囲んだかと思うと、一瞬にして3人の

目の前にギルドの扉が現れました。

アランはキヨロキヨロと周囲を見渡します。  
誰も気付いていないようです。急いで扉を開くとギルドに入りました。

アランに気付いたカウンターのお姉さんが軽く手を上げましたが、  
連れがいることに気付き急いで手を下ろしました。  
アランは一人先行して、カウンターまで行くとお姉さんに頼みます。

「すみません。急いで相談したい事があります。マスターとお爺さんを呼んでもらえますか？」

お姉さんは少し疑問を持ちましたが、迷宮で何か発見したのだろうと思い別室に案内してくれました。  
3人で別室の椅子に掛けて待つていると、扉が開きマスター達がやってきました。

「待つたかね。私に相談したいとのことだが？」  
3人が席に着くなりマスターは切り出しました。

「彼女のことです。地下15階の神殿にいました。僕達の手伝いをしてくれると言っていますが・・可能でしょうか？」

アランの言葉に改めて3人はアラン達が3人連れであることに気付きました。  
サリナは元々アランと行動を共にしています。

すると、アランが言っているのは・・

突然、3人は驚きました。お姉さんは立ち上がりつつあります。

「人形……なのか。……これほど精巧な造りは、ワシリラの仲間で出来ぬ……」

「伝説では、数体制作されたと言われている、あのビコッティの作品なの？」

「それより、どうして動く。精密人形の伝説は私も知つておるが、動くとは聞いておらぬぞ！」

アランは地下15階での出来事をマスター達に話しました。創玄な地下神殿と神殿前の台座での出来事。四角錐の中の出来事。アランに説明できない部分は、たどたどしくサリナが話します。

「アルテミナス・ドム・レギウス……そう名乗ったのか？」

「はい。」

お爺さんはウウ・ムと低く唸りました。

「ナルミスさん何か知つてるの？」

「ウム。ドワーフ族に伝わる伝説じゃ。」

そう言つとお爺さんは伝説を話しあじめました。

昔、遙か昔のことじや。

地上には、人間族しかおらなんだ。

地上の人間族はその数を増していき、自然を壊し畑に変えていつた。

山を削り、砂漠を緑にかえるなど彼等の技では簡単なことじやつた。

しかし、それでも人の数が増え続けると足りなくなつたのじや。

そして、ついに土地争いに端を発した戦が起こつた。

戦は技術を発展させる。これは何時の時代も同じじゃった。

違うことは、彼等がその戦で使つた技で、我々の祖先が出来たと  
いうことじゃな。

ドワーフ、エルフ、人魚・・皆、この戦によつて生まれたのじゃ。  
そして、戦が世界を飲み込んだ時、今に伝わる2つの技術が生ま  
れたのじゃ。

1つは魔法。それまでの人間には魔法は使えなかつた。  
もう1つは、魔物。この戦で、戦争の道具として魔物は生まれた  
のじゃ。

今も伝わる英雄端はこの時代のものじゃな。年月を経てかなり変  
わつてはおるがの。

人、ドワーフ、エルフ、魔物・・色々な人間が生き残るために必  
死で戦つた。

やがて、戦が千年を越えようとした時、強大な力を持つ魔物が生  
まれたのじゃ。

その魔物を倒すため、人間族の者達は数体の精密な人形を作つた。  
ビコッティの娘と呼ばれる人形じゃ。

しかし、その人形を動かすためには制約があつた。  
人の魂のみがその人形を動かす。そして、その人形に合致した魂  
は当時の人間族の皇帝の1人娘・・

皇帝は悲しみの内に娘を殺し、その魂を人形に封じた。

人形達は壮絶な魔法合戦を魔物と行つたと伝説は言つてある。ど  
のような魔法を使つたかは不明じやがな。

そして、強力な魔物を倒した後、帝国に戻つた人形を皇帝は地中  
深くに作られた神殿に封印したと伝説にはある。

その後は、この世界の通りじやな。

「さつきのこの人形の名前は？」

「皇帝の一人娘の名じやよ。」

「ふ～む・・となると、このアルトという娘は、とんでもない魔法使いということか？」

「伝説の通りじゃと、やうなるの。」

改めて3人はアルトを見つめます。

（それは、かつての姿。今は反応炉も停止しております。使える魔法とて数段低い物ばかり、この世界に脅威はあたえませんが・・・）

頭の中に直接響く声にまたしても3人は驚いた。

「会話ができるのか？ それなら話が早い。」

「我々には判断できぬが、上位ギルドに一応の報告は行つ。元々、先行調査の優先権はアルト達にあるのだからかれらの発見物とすれば何の問題もないはずだ。」

「では、このまま彼等と行動を共にせることですか？」

伝説の品ですよ。」

「伝説ではある。しかし、物ではない。意志があるのだ。」

3人はしばらく話合いを続けていたが、やがてマスターはアラン達に告げた。

「アルトをアラン達の一員として認めよう。ギルドカードもアルト名義で発行する。・・後、残り5階だ。頑張れよ。」

「マントを貸してあげなさい。その姿はこの村では目立つわよ。おねえさんが注意してくれました。」

早速、アランは革鎧の上に羽織つていたマントをアルトに貸してあげます。

「しかし・・お前達にはあきんの。次に何かあればまた来るがいい。」

お爺さんも、やうやく励ましてくれます。

アラン達は「それでは、」と挨拶すると特別[屋]を出て、自分の家に一戻ることにしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9151v/>

---

とある王国のおとぎ話

2011年11月27日21時47分発行